

世界との絆を紡いで50年
そして未来へ

JAPANFOUNDATION
国際交流基金

50th
ANNIVERSARY



ご挨拶

2022年10月、国際交流基金は設立50周年を迎えました。これまで当基金の活動を支えてくださった関係者の皆様、また、ともに国際交流の現場でご尽力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

50年前、日本は戦後の高度経済成長の中、国際社会における存在感を急速に高めていました。東京オリンピック(1964年)、大阪万博(1970年)、札幌冬季オリンピック(1972年)など大きなイベントが開催され、世界第2位の経済大国になった頃でした。

こうした時代背景の下、1972年10月2日、「我が国に対する諸外国の理解を深め、国際相互理解を増進し、及び文化その他の分野において世界に貢献し、もって良好な国際環境の整備並びに我が国の調和ある対外関係の維持及び発展に寄与すること」(独立行政法人国際交流基金法第3条)を目的として、国際交流基金が設立されました。以来、日本を取り巻く国際情勢の変化に応じながら、1. 文化芸術交流、2. 海外における日本語教育、3. 日本研究・国際対話の各分野で、諸外国との文化交流に取り組んでまいりました。

本冊子は、当基金の50年のあゆみを振り返るとともに、これまで私どもの事業に様々な形でご協力いただいた方々の生の声をご紹介しながら、国際文化交流の意義や今後のあり方を皆様とともに考えるきっかけとなれば、と

の願いで制作しました。残念ながら、半世紀にわたる活動のすべてを網羅することはできませんが、その代表的なものが掲載されています。ぜひ一つでも多くの物語をご高覧いただき、長年にわたる日本と世界の交流の深みと広がりに触れていただければ幸いに存じます。

この50年間、グローバル化の進展とともに、世界の日本に対する理解は大きく進んできました。例えば、今日、海外の日本語学習者は概ね380万人を数え、1970年代末から約30倍の伸びを記録しています。かつて日本文化への関心が専門家や愛好家に限定されていた状況と比較し、世界中の広範かつ多数の人々が日本文化の様々な側面に関心を持ち、また、楽しんでいる姿を見ると、まさに隔世の感を禁じえません。

一方で、今後の道のりは決して楽観できるものではありません。この2年あまり、コロナ禍によって私たちの日常は激変し、日本と世界の人的交流も大きく制限されました。また、世界各地での自然災害の頻発や、国際秩序の根幹を揺るがす事態の発生など、胸に突き刺さるような光景が、日々、メディアによって報じられています。

しかし、このような激動の時代においてこそ、文化交流の真価が問われていると言えるのではないのでしょうか。多極化し、不透明な要素が増している国際社会にあって、日本が世界の人々と絆を深めていくことは、以前にも増して重要となっています。また、多くの国がソフトパワー外交への関心を高め、この分野においても競争が激しくなっており、今後も日本文化の存在感を維持していくためには、従来以上の努力を払わなければならないと感じています。

国際交流基金は、これからも日本と世界の人々が相互の理解と信頼を深めるための触媒の役割を果たし、日本と世界の良好な関係を築くための努力を重ねる所存です。今後とも皆様のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、本冊子の制作にあたり、インタビューをご快諾くださり、数々の貴重な情報を提供して下さった多くの方々に篤く御礼申し上げます。



2022年10月
国際交流基金
理事長 梅本和義

50年のあゆみ

国際交流基金が歩んできた50年を、
年代ごとの活動を象徴する写真とともに振り返ります。

1970年代

(1972~1979年)

戦後の高度経済成長により日本が経済大国となり、国際的な役割が高まるにつれ、等身大の日本の姿を海外に伝え、国際相互理解を図るとともに、文化の面で世界に貢献する専門機関の必要性を唱える声が高まりました。このような時代背景の下、1972年10月2日、外務省所管の特殊法人として国際交流基金が発足します。前身の財団法人国際文化振興会から海外5都市の拠点を継承し、組織の基盤づくりを行うとともに、日本を取り巻く国際情勢の変化に応じながら、文化芸術交流、海外日本語教育、日本研究・国際対話の各分野で今日に連なる事業を開始します。



1. 1972年・国際交流基金設立式で挨拶する田中角栄首相(当時)
2. 1974年・作家のアンドレ・マルロー氏(仏)を招へい

1980年代

(1980~1989年)

経済成長を背景として、世界中で日本への関心が高まる中、1981~82年、イギリスで大型日本フェスティバルが開かれます。国際交流基金はその中心的な企画として「江戸大美術展」を開催、52万人を動員する成功を収め、以後、各国の芸術祭や文化機関と協力し、日本文化の紹介を強化します。他方、設立10周年を迎えた1982年には、国内で6件の記念事業を実施。外国文化の日本への紹介を本格化させます。また、日中平和友好条約の締結を受け、1980年、在中国日本語研修センター(現・北京日本学研究中心)を開設し、今日まで高いレベルの日本研究・日本語教育を行っています。この間、世界の日本語学習者数は順調に伸び、1984年に日本語能力試験を海外19都市で初めて実施。1989年には海外日本語教師の研修施設として日本語国際センターが開設されます。



1. 1981年・「江戸大美術展」(英)に52万人が来場
2. 1984年・「アフリカ映画祭」を開催
3. 1985年・北京日本学研究中心を開設
4. 1989年・日本語国際センターを開設



1990年代

(1990~1999年)

1990年、日本へのアジア文化の紹介を行うアセアン文化センターが誕生。1995年にアジアセンターに発展改組され、アジア諸国との双方向交流を推進します。また、東西冷戦の終結と日米貿易摩擦の激化を背景に、日米同盟の強化を図る観点から、1991年、国際交流基金の中に日米センターが開設されます。以後、従来の対米事業に加え、知的交流と市民交流を通じて、両国の懸け橋となる人材を多数輩出するとともに、世界が直面する課題に対する日米共同の取り組みを一貫して支援しています。1997年には日仏・官民協働により、最大規模の海外拠点としてパリ日本文化会館が開館。また同年、各国の外交官、公務員、研究者など、さまざまな日本語学習者向けの研修施設として関西国際センターも開設されます。



1 ©YAYOI KUSAMA



2

3



4

撮影：谷古宇正彦

- 1993年・第45回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館
日本代表作家は草間彌生氏
- 1995年・安倍フェロウシップ・プログラム・シンポジウム
「戦後50年の日米関係と政策研究の検証」開催
- 1997年・パリ日本文化会館を開設
- 1997年・アジア6か国共同制作作品「リア」初演

2000年代

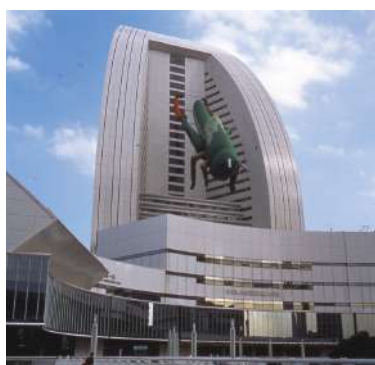
(2000~2009年)

グローバル化が進展し、世界における日本文化の存在感が高まる中、日本でも本格的な国際美術展の開催を望む声が上がります。国際交流基金は、長年にわたるヴェネチア・ビエンナーレへの参加経験に基づき、2001年、第1回横浜トリエンナーレの立ち上げに参画し、国内外から35万人を動員する成功を収めます。同年、米同時多発テロ事件が発生、2003年にはイラク戦争が始まる中、中東地域との交流を強化するとともに、2005年に米南東部を襲ったハリケーン・カトリーナの被害などを契機として「平和構築・災害復興と文化」という新たな課題にも取り組みます。2003年10月には特殊法人から独立行政法人へと移行。また、2006年には日中間の青少年交流を促進する日中交流センターが設置されます。2008年のインドネシア、フィリピンとの経済連携協定の発効に伴い、看護師・介護福祉士候補者向けの日本語研修プログラムも始まります。

2



- 2001年・第1回横浜トリエンナーレ、来場者数35万人
- 2005年・アフガニスタンよりイスタリフ焼きの陶工を招へい
- 2008年・インドネシア人介護福祉士候補者に対する日本語研修事業を開始



1

権昇+室井尚『インセクト・ワールド、飛蝗』2001
Tsubaki Noboru + Muroi Hisashi The Insect World / Locust 2001 photo: Mikio Kurokawa

3



2010年代

(2010~2019年)

東日本大震災を受け、文化交流を通じた復興支援の取り組みが強化されます。2014年には、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて「文化のWA（和・環・輪）プロジェクト」が始動。新たなアジアセンターが設置され、東南アジアを中心とする地域との双方向交流の拡大・深化を図ります。2018年には日仏友好160周年を記念し、国際交流基金を事務局として、海外で史上最大規模の日本文化の祭典「ジャポニスム2018」をパリを中心に開催。会期中353万人を超える来場者に日本文化の幅広い魅力を届けました。同年、世界の日本語学習者数は385万人に達します。国際交流基金は2010年に「JF日本語教育スタンダード」を発表し、学習者のコミュニケーション能力を高めるための日本語教育の普及を加速するとともに、2019年には特定技能制度での来日希望者向けの日本語基礎テスト（JFT-Basic）も開始します。



1. 2013年・日本語教材『まるごと 日本のことばと文化』各国語で刊行
2. 2014年・東南アジアとのサッカー交流事業「ASIAN ELEVEN」開始
3. 2015年・東北地方とアジアの芸能交流事業「Sanriku-Asian Network Project」開始
4. 2018年・「ジャポニスム2018：響きあう魂」(仏)に353万人超が来場
5. 2019年・「Japan 2019」(米)に129万人超が来場

2020年代

(2020年～)



1. 2020年・国際交流基金アジアセンター×東京国際映画祭 co-present トークシリーズ「アジア交流ラウンジ」開催
2. 2021年・舞台公演オンライン配信プロジェクト「STAGE BEYOND BORDERS —Selection of Japanese Performances—」。計92作品、総視聴回数約950万回以上

2020年2月以降、世界中に広がった新型コロナウイルス感染症は文化交流にも深刻な影響をもたらしています。国際交流基金は日本と世界の人々の交流の回路を閉ざさぬよう、オンライン事業などの取り組みを活発化させるとともに、より効果的・効率的に活動を展開できるよう、2022年4月、組織改編を行いました。50年前の設立当初、世界5都市でスタートした海外事務所ネットワークは、多くの人々に支えられ、24か国25都市へと拡大しました。

JFをめぐる 物語



50周年にあたり、国際交流基金のこれまでとこれからを見つめる特別記事をお届けします。

文化

- [01] 響きあう魂——「ジャポニスム2018」が残したもの
- [02] ヴェネチアと横浜、国際美術展に集う世界のアートと人々
- [03] ドラマ、アニメ、ドキュメンタリー……テレビ番組を通じて世界に広がる日本の心
- [04] 『俊寛』『アンティゴネ』『桜の園』、言葉の壁を超えて広がる感動の輪

言語

- [01] カイロ大学から花開いた中東の日本語教育、国際交流基金と共に歩んだ50年の軌跡
- [02] 海外の日本語教師たちの第二の故郷、日本語国際センターが提供する研修事業
- [03] アジアで日本語を学ぶ中高生たちに、生きた言葉と文化を届ける「日本語パートナーズ」

対話

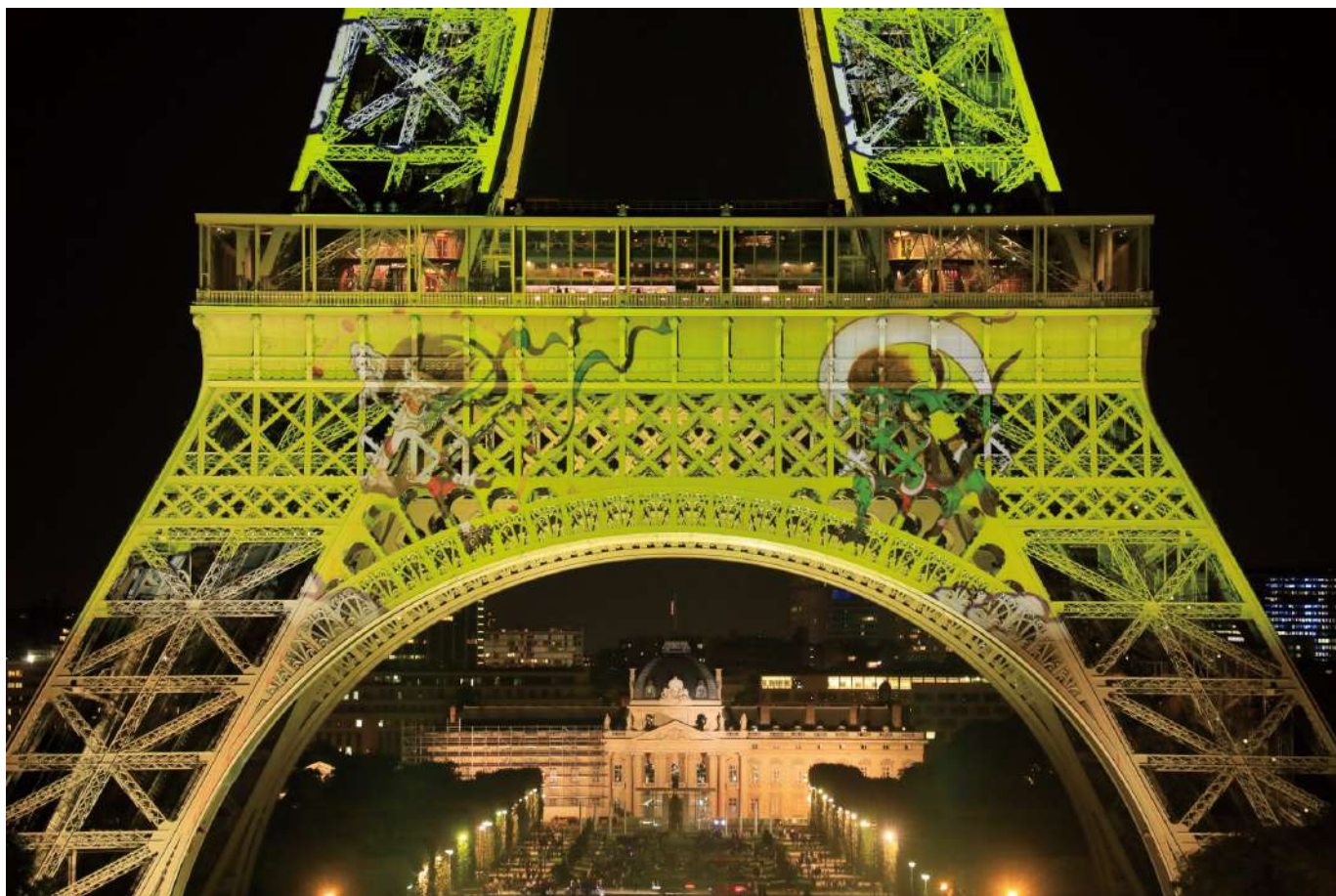
- [01] 米国人研究者が解き明かす、『源氏物語』の奥深き世界
- [02] 「心連心」——若者世代が心と心をつなぎ、広がりつづける日中友好の輪
- [03] 「互いに学び、互いに強くなる」 スポーツで育まれていくアジアとの絆
- [04] 次世代リーダーの育成のために、日米を結ぶ2つのプログラム

その他

地域の伝統・文化を通じた「心の復興」：震災を乗り越えて

50周年を記念して開設した特設サイトには、さらに多くの「物語」が掲載されています。
ぜひ、いろいろな「物語」をお楽しみください（特設サイトのご案内は35ページをご覧ください）。

響きあう魂—— 「ジャポニスム2018」が残したもの



ジャポニスム2018公式企画「エッフェル塔特別ライトアップ<エッフェル塔 日本の光を纏う>」の様。初めて欧州に渡った国宝<風神雷神図屏風>（俄屋宗達筆、建仁寺蔵）（部分）をはじめ、日本を象徴するさまざまな図柄が次々にエッフェル塔に映し出されました。
企画・プロデュース 石井幹子&石井リーサ明理

国際交流基金が長年にわたり注力してきた
大規模な日本文化フェスティバル。
幅広い日本ファンを創出する上で重要なのは、
全体のコンセプトと開催国や関係者とのコラボレーションです。

国際交流基金（JF）では、日本文化のさまざまな魅力を工夫して紹介しています。その真髓が凝縮されているのが、大型日本フェスティバルです。特に、波及効果という点で成功を収めたのが「ジャポニスム2018:響きあう魂」でした。日仏友好160周年の節目である2018年に、JFが事務局となり企画から実施までを担った、かつてない規模の日本フェスティバルです。「知られざる日本」を紹介したい。アピールしたいことは、この一言に尽きます」と、事務

局で事務総長を務めた安藤裕康理事長（当時）は述べています。

「ジャポニスム2018」が重視したコンセプトは、日本人の美意識と日仏の共鳴でした。人間は自然の一部であると考え、自然を崇め敬ってきたこと。調和を重んじ、寛容の精神で多様な価値観を共有し共存させてきたこと。そのような日本人の感性を、縄文の昔から現代のデジタルアートに至るまでの流れの中で、フランスの人々と分かちあおうというのが、「ジャポニスム2018」

での試みでした。

それまでに、海外で行われた大型の日本フェスティバルでは、ともするとコンセプトが開催国の見たい日本観に偏る傾向がありました。「ジャポニスム2018」は日仏共同プロジェクトであり、JFが重視したのは、日仏双方が意見を出し合い練り上げたプログラムによって、知られざる日本観および日本人の精神性を伝える、ということでした。

1867年に開催のパリ万博において日本の美術工芸品が紹介されたこと



「若冲〈動植綵絵〉を中心に」展の会場となったパリ市立プティ・パレ美術館前の長い行列。欧州初の本格的な若冲展は、熱狂的に迎えられました。

で、日本文化は国際社会に広く知られ、「ジャポニスム」という言葉が流行しました。それから約150年後の2018年、プロジェクト名を「ジャポニスム2018」とし、「2018」を付記したのは、それまでのオリエンタリズムへの憧憬を含んだ19世紀のジャポニスムから一線を画し、日本人の「いま」を伝えるとの思いが込められています。

古代から現代まで、 知られざる日本文化を紹介

しかし、開催までの道のりは平坦なものではありませんでした。たとえば、「若冲〈動植綵絵〉を中心に」展の企画

に対し、フランス側の当初の反応は「若冲？ 聞いたことがない、北斎ならば考える」というものでした。そこから対話を重ね実現された若冲展には、4週間という限られた会期で7万5000人が来場し、会場となったプティ・パレ美術館前に長蛇の列ができるほどの盛況となりました。フランスの文化情報誌『テレマ』は「見終わった後も余韻が覚めない」「若冲の天才は細部に宿っている」と評し、「この展覧会は、おそらく日本が我々に差し出した最も美しい贈り物ではないか」と記事を結びました。プロジェクト名にある「響きあう魂」は、「日仏の共鳴」というコンセプトを反映したものです。公式企画としてフ

ランスでは初の展示を行ったチームラボは、観客が作品の一部となれる新たな体験型デジタルアート展「teamLab : Au-delà des limites (境界のない世界)」をラ・ヴィレットで開催し、デジタル世界の中で自然に没入する体験を生み出しました。このアート展には約30万人が来館しました。会期中は子どもの歓声が絶えず、来場者からは「チームラボ展での体験は、ここでしかできない旅に出たようだった」などの感想が寄せられました。

言葉を越えた共感の場は、チームラボの展示だけではありません。フェスティバルの総合コンセプトを体現した「深みへー日本の美意識を求めてー」展は、19世紀の邸宅を改修したロスチャイルド邸で開催されました。ANREALAGEや真鍋大度、北斎や仙厓といった新旧の日本のアーティストの作品と共にピカソやゴッホの作品も展示され、空間全体で東西の対話を生み出そうとする意欲的な試みでした。SNS上では、来場者から「日本の美意識に浸れる展覧会だった」との感想が多く上がりました。

舞台公演も雅楽から現代演劇やダン



チームラボの展覧会は、デジタルによってリアルタイムで描かれたいくつもの作品同士が混ざり合い、人々の存在によって変化していく空間でした。境界のないアートに身体ごと没入する体験で、大人気となりました。

Exhibition view, teamLab : Au-delà des limites, 2018, Grande Halle de La Villette, Paris ©teamLab



「ジャポニスム2018」の公式企画として行われた、初音ミクのフランス公演は、初の欧州ツアー「HATSUNE MIKU EXPO 2018 EUROPE」の初日もなりチケットは即完売。会場のラ・セーヌ・ミュージカルには多くのファンが駆け付け、公演後のアンケートでは、回答者の全員が日本への親近感が増したと回答しました。

ス、ボーカロイド（初音ミク）、2.5次元ミュージカルまで幅広い企画が実現しました。また、日本映画100年の歴史を紹介する大型特集上映会や、テレビでの日本特集も組まれました。日本食・日本産酒、工芸から日本各地の祭りの紹介、さらには、柔道、茶道、華道、禅、文学に関連したイベントなども開催され、熱心な日本ファンからあまり日本を知らない人まで、多くの来場者が日本文化を楽しみました。ジャック・ラング元フランス文化大臣は、「『ジャポニスム2018』によって、我々はステレオタイプとは程遠い日本を目にすることができました」と述べています。

大事なものは、未来へとつなげていくこと

「ジャポニスム2018」は会期の8か月間に、日仏合わせて50以上の都市で、300以上の催事が行われ、来場者数は353万人に上りました。これはパリ市民220万人を上回る数です。多種多様な企画を通して日本人の美意識と価値観を伝えることができた8か月でしたが、一過性のものに終わらせないためには、「その後」の継続が肝心です。

公式企画の1つに、日仏の高校生たちが交流した「高校生プレゼンテーション発表会」がありました。会期中は互いに自分たちが調べ、考えたことを発表しあい、閉幕1年後の2020年2月、JFはこの企画に参加したフランスの

高校生を日本に招き、ホームステイや日本文化体験、日本の高校への1日体験入学などの機会を提供しました。その後もオンラインを活用し、高校生同士の交流がはぐまれています。

「ジャポニスム2018」の興奮が覚めやらぬ中、2019年には舞台をアメリカに移し、「Japan 2019」という日本フェスティバルが開催されました。ワシントンD.C.およびニューヨークを中心に、JFは公式企画8件を実施。このうち3つの大型美術展は、JFのフェローとして日本での研究滞在経験を持つアメリカのキュレーターが監修したものです。長年にわたる日本研究と日米交流が結実した展覧会は、ユニークな切り口で日本美術の魅力を紹介するものとして現地メディアにも取り上げられ、高い評価を受けました。

文化芸術交流は、人々の心に直接的に訴え、言葉を越えた共感の場をつくり出し、共に発見し創造する喜びを分かちあうことで、幅広い日本ファンを創出する事業領域。その真髄が発揮される日本フェスティバルは、変わる事のない日本の魅力と、絶えず更新される日本の新たな“顔”をお披露目する絶好の機会です。JFはこれからも、こうした日本文化の多面的な魅力を感じていただける良質な企画を、多くの方の協力を得て世界各地で実現していきます。



若い世代が主役となった公式企画「高校生プレゼンテーション発表会」では「日仏交流、この人に注目！—ジャポニスム2018につながる人と歴史—」をテーマに、日本とフランスの高校生たちがパリ日本文化会館でプレゼンテーションを行いました。

Photo: ©MIHO

「Japan 2019」の公式企画の1つ、「神道：日本美術における神性の発見」展の展示風景。神仏習合など6つのテーマを通じ、神への畏敬の念が日本美術に与えてきた影響を紐解きます。本展を監修したクリーブランド美術館のシネード・ヴィルバー日本美術学芸員は、2002年度のJFフェローとして東北大学で研究活動を行いました。Photo by David Brichford; courtesy of the Cleveland Museum of Art.



ヴェネチアと横浜、 国際美術展に集う世界のアートと人々



ヴェネチア・ビエンナーレの会場であるジャルディーニに建つ、吉阪隆正設計の日本館。2014年に伊東豊雄の手によって改修されました。Photo by: Peppe Maisto

世界から注目の集まる「ヴェネチア・ビエンナーレ」の
日本館展示は国際交流基金が1976年から行う主要事業です。
ヴェネチアへの参加を糧に、
2001年には「横浜トリエンナーレ」立ち上げに参画しました。

「美術のオリンピック」とも呼ばれるヴェネチア・ビエンナーレ。1895年に始まり、国別参加方式をとるこの国際展に、日本は1952年の第26回に初参加し、国際美術界への復帰を果たしました。その窓口となったのが、国際交流基金(JF)の前身である国際文化振興会(KBS)でした。以後、日本はヴェネチア・ビエンナーレに継続的に参加し、1976年からはJFが日本館の展示を主催。世界各地から多数の人々が集う国際舞台で、日本代表作家による展示を通じて日本の最先端の現代アートを発信しています。

よりオープンなプラットフォームとしての日本館を期待

1990年代から日本館を見続けてきたのが、イタリア国立21世紀美術館(MAXXI)のアーティストック・ディレクター、ホウ・ハンルー氏です。ホウ

氏は日本館の印象を、こう語ります。「どの年の展示も、その時の日本や世界の現代アートシーンをよく反映していたと思います。1999年の宮島達男のデジタルカウンターを使用した作品は、技術から発想された創作という1990年代の空気を体現していました。また、2013年の田中功起の作品は、映像や写真がにぎやかにコラボレーションし、日本館の吹き抜けの空間をうまく使っているのが印象的でした」

2013年の日本館での田中功起の展示は高く評価され、2017年、田中はビエンナーレの企画展に招待されました。また2015年の企画展に招かれた石田徹也がヴェネチアで「発見」され、マドリッドとシカゴでの個展開催につながった例からも明らかのように、ヴェネチアの評価は世界の評価へと直結しています。

ホウ氏は、日本館の今後に期待を込めてこう語ります。「本来、アートはオ

ープン・プラットフォームであるべき。つまりアートは競争するものではなく、社会をもっと開かれたものにし、多様性を推進するものなのです。これからの日本館には、さまざまな背景をもつアーティストが、グローバルな問題をどんな角度からどう見ているのかがわかるような、意欲的な展示も期待したいですね」

ヴェネチア・ビエンナーレでは美術部門に加えて1980年に国際建築展が始まり、2001年からは2年に一度、美術展と交互に開催されています。日本は第5回の1991年から公式参加し、磯崎新がコミッショナーを務めた1996年と、伊東豊雄が務めた2012年にパヴィリオン賞(金獅子賞)を受賞しました。伊東は、東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田に、被災者の憩いの場「みんなの家」をつくるプロセスを展示。この「ここに、建築は、可能か」展は、自然災害に建築がどう向き合うかを通して、建築とは何かという根源的な意味を問い直す勇気と重要さが理解され、高く評価されたことが受賞へつながりました。



田中功起の2013年の日本館での展示作品。田中は「抽象的に話すこと—不確かなものの共有とコレクティブ・アクト」というタイトルのもと、映像作品のモニターや写真作品、段ボールや木材、映像に登場する本などがランダムに置かれたインスタレーションを展示し、日本館は特別表彰を受賞しています。ピロティの展示風景 『ベインティング・トゥ・ザ・パブリック(オープン・エア)』 2012 Photo: Takashi Fujikawa, created with Aoyama Meguro, 撮影:木奥恵三



第1回横浜トリエンナーレには、会期中の2か月で約35万人が来場しました。写真は塩田千春氏の言及した出品作です。塩田千春『皮膚からの記憶』2001年 横浜トリエンナーレ、神奈川、日本 写真：怡土鉄夫 ©JASPAR, Tokyo, 2022 and Chiharu Shiota

ヴェネチアの経験が、横浜に生きている

森美術館特別顧問・美術評論家の南條史生氏もJFとヴェネチア・ビエンナーレとの関わりをよく知る人物です。「1978年から1986年までJFに勤務し、展示事業のプログラムディレクターを務めました。当時から、海外が見たい日本と、日本が見せたい日本とのせめぎ合いの現場におり、互いの意向がぶつかり合う中、日本の現代美術の国際化に奔走しました」

南條氏とヴェネチア・ビエンナーレとの出会いはJF在籍時代にさかのぼり、職員として1984年の日本館展示を担当したこともありました。JFを離れた1988年には、新人作家の登竜門とされたアペルト部門（現在は廃止）でアジア初のキュレーターを務めたほか、ビエンナーレ100周年の1995年には公式後援企画として、村上隆をはじめ世界数十か国の気鋭の作家が参加する「トランスカルチャー」展（国際交流基金、福武学術文化振興財団共催）をデナ・フリース＝ハンセンと共同監修。さらに1997年には日本館のコミッションナーを務め、内藤礼の展示で大きな話題を集めました。

ヴェネチアをはじめ海外の国際展への参加によって、日本のアーティストの国際的な活躍の場が広がる一方、日本においても国際的な発表の場をもつべきでは、との声が上がることになりました。これを受け、JFが中心となって開

催されたのが「2001年 第1回横浜トリエンナーレ」です。日本を含め38か国から109人の作家が参加、この時、河本信治氏、建畠哲氏、中村信夫氏と共にアーティスト・ディレクターを務めたのも南條氏でした。

横浜トリエンナーレ2001は「現代美術を広く社会の中に位置づける」ことをテーマに掲げ、現代アートの枠組みに自足することなく、幅広い市民と交流し対話すること、さらに街の活性化に寄与することを目指しました。その結果、大規模なイベントホールや赤レンガ倉庫など、これまで美術展示とはあまり縁がなかった既存施設を含め、横浜市内各所に大型展示が出現しました。「道端のゴミまでアートに見えるわね、と年配の方が言っていたことが忘れられません。作品選定にあたっては、自分たちの目で選び、その選択と判断を見せる、ということが欧米中心の美術観への挑戦でした。開催に向けて活発な議論を重ねたことは、今に残る財産です。ヴェネチアでの経験が横浜には確実に生きています」と南條氏は語ります。

横浜トリエンナーレは国際的な発表の舞台であり、日本のアート情報を世界へ発信する場でもあります。また毎回、日本のアーティストも海外のアーティストと共に参加しています。その1人が、第1回のトリエンナーレに参加し、現在はドイツを拠点に活動する塩田千春氏です。塩田氏は当時をこう振り返ります。「建畠さんが調査でベルリンに来られた時、私がちょうどベルリンの美術館で作品を展示していて、声をかけてもらいました。27歳の時点で、初めて大きな舞台で展示する機会をもらって嬉しかったのを覚えています。記憶をテーマにした作品を作っていたので、14mほどの大きなドレスに土をまぶしてシャワーを流し続けて、洗っても洗い落とせない皮膚からの記憶を表現したいと思いました」

塩田氏の言及した展示作品『皮膚からの記憶』は、圧倒的な迫力とともに多くの人の記憶に残り、同氏は現在、国際的なアートシーンで最も顕著な活動を行う作家の1人となっています。2015年にはヴェネチア・ビエンナーレの日

本代表作家に選出され、世界中から集められた18万個の鍵が結ばれた赤い糸のインスタレーション『掌の鍵』は大評判となりました。さらに、2019年に東京の森美術館で開催した「塩田千春展：魂がふるえる」は66万人を動員。同展は2022年、オーストラリアのクイーンズランド・アート・ギャラリー/ブリズベン近代美術館へ巡回しました。

ヴェネチア・ビエンナーレをはじめとする国際美術展の場において、アーティストや美術界・建築界の専門家たちはダイナミックな国際交流を続けています。JFも、そのような場だけでなくその後の作家たちの進化にも併走しながら、日本美術や建築の魅力を世界に伝え続けていきます。



ホウ・ハンルー（Hou Hanru）氏。イタリア国立21世紀美術館のアーティスト・ディレクター。1991年にフランス館の共同キュレーターを務めたことがきっかけで、ヴェネチア・ビエンナーレに関わるようになりました。2008年の横浜トリエンナーレではインターナショナル・コミッティの委員を務めています。Photo: ©Musacchio&Ianniello



南條史生氏。森美術館特別顧問、美術評論家。JFの共展として米7都市を巡回し、大きな話題となった「アゲインスト・ネイチャー 80年代の日本美術」展の共同監修をはじめ、今日まで数多くの国際的な美術プロジェクトを手がけています。



塩田千春氏は大阪府生まれ、ベルリン在住のアーティストです。「言語と国境を超えて共有できて、国籍も性別も関係ないところでの対話を実現してくれるのがアートだと思っています」と語ります。Chiharu Shiota Berlin, 2020 Photo by Sunhi Mang

ドラマ、アニメ、ドキュメンタリー…… テレビ番組を通じて世界に広がる日本の心



©2021 TOKAI TELEVISION BROADCASTING CO., LTD
TELEPACK CO., LTD

日本ファンを増やすきっかけとして、大きな影響力をもつテレビ。
海外のテレビ局に番組を提供する国際交流基金の事業は、
日本と世界の人々の心の距離を縮める役割を果たしています。

『花嫁のれん 番外編』として、6人の外国人が仲居修業に挑むドキュメンタリーを東海テレビと国際交流基金が共同制作。100名を超える応募者の中から選ばれたアメリカ・メキシコ・スペイン・ウズベキスタン・フィリピン・台湾出身の女性たちが、時に衝突しながらも絆を深めていきます。

国際交流基金（JF）では、日本のコンテンツへのアクセスが少なく、視聴機会に限られる国・地域を中心に、日本のテレビ番組を紹介する事業を行ってきました。広い範囲に効果的に日本文化を紹介する取り組みとして、40年近くにわたり実施され、170以上の国・地域に延べ5000本以上の番組が提供されています。それまで日本文化に馴染みが薄かった国々でも、テレビ番組を通じて、日本ファンが増えています。

世界中で親しまれる『おしん』、 そして『花嫁のれん』

世界中で親しまれている代表的な番組が『おしん』です。JFが多くの言語への翻訳に協力し、これまでに約70か

国に提供されてきました。東北の農村に生まれ育ち、幾多の困難に見舞われながらもひたむきに生きる主人公の姿は世界中で共感を呼び、「オシンドローム」と呼ばれる社会現象を引き起こしました。脚本を担当した橋田壽賀子さんが2021年に亡くなった際は、海外からもその死を悼む声が数多く届き、改めてその浸透ぶりと根強い人気を示されました。

近年でも、JFが提供した番組の中から海外でのヒット作が生まれています。2010年に日本で放送開始した昼ドラマ『花嫁のれん』シリーズもそのひとつ。老舗旅館を舞台に嫁姑バトルが展開されるこのドラマは、約20の国と地域で放送され人気を博しています。「嫁姑問題がテーマのドラマに、海外で

もこんなに反響があるとは思っていませんでした。言語や文化を超えた共通の関心事なのかもしれませんね」と、制作を担当した東海テレビの市野直親東



2021年にザンビアの国営放送 ZNBCで行われた、水内大使からカサンダメディア情報大臣へのテレビ番組の引渡式の様子。提供:在ザンビア日本国大使館



老舗旅館を舞台に、元キャリアウーマンの嫁と、伝統を重んじる姑のバトルを描くドラマ『花嫁のれん』。日本では、2010年から2015年の間に全4シリーズ205話が放送されました。



『DOCTORS～最強の名医～』のカザフスタンでの人気は、同国の雑誌社が、数ページにわたる特集を組んだほど。

京制作部長は振り返ります。「優しさや思いやりといった部分に共感されるのではないのでしょうか。人が人を大切にすること、という普遍的な感情は、世界に伝わっていくものなのだと思います。また、JFによる番組提供で、放送を想定していなかった国でも視聴されているのを知り、どんな人がどのような場で番組を見ているのか、興味がかきたてられますね。ドラマのプロデューサーとして、やりがいを感じます」。海外での高い支持を受けて、2021年、東海テレビとJFは共同で、ドラマのモチーフとなった旅館で外国人女性6名が仲居修業に挑むドキュメンタリー『日本のおもてなしに挑戦～ドラマ「花嫁のれん」番外編～』を制作しました。

医療ドラマでも、ヒット作が生まれています。この事業で提供した沢村一樹氏主演の『DOCTORS～最強の名医～』は、カザフスタンで一大ブームになりました。「医療のシステムや環境も違う中で作品が受け入れられた事に驚きはありますが、スタッフ共々大切に育ててきた作品なので大変光栄に思います」と、沢村氏も海外の視聴の反応に手応えを感じているそうです。「私が演じる相良先生と高嶋政伸さん演じる森山先生とのコミカルなやり取りのなか、医師らが患者さんに正面から真剣に向き合う姿に共感と希望をおぼえていただけたのなら嬉しいです」

JFが提供した番組が、意外な効果をもたらした例もあります。2006年から2007年、JFは戦後復興期にあったイラクに、現地で絶大な人気を持つスポー

ツであるサッカーを題材にしたアニメ『キャプテン翼』のアラビア語版を、現地テレビ放送局に提供しました。放送されたのは、主人公の大空翼がプロサッカー選手となり、世界のトップ選手たちと競い合いながら友情をはぐくむ52話。それまでは衛星放送のみでしたが、当時のイラクで衛星放送を視聴できる家庭はごく僅か。地上波放送の実現で、より多くの視聴者に、とりわけ中東地域の未来を担う子どもたちに夢と希望を与えることができました。2009年までイラク・サマワに人道復興支援のため派遣されていた日本の自衛隊は、『キャプテン翼』の大きなシールでデコレーションした給水車で地域内を回りました。アニメ番組が日本の顔となり、現地での活動の円滑化にも一役買うこととなったのです。

現地のテレビ局が、日本文化紹介の窓口となる

海外のテレビ局では、JFの番組紹介事業が大いに役立っているようです。メキシコの全国放送局・Canal22では、全放送の約7%にあたる番組が、JFがサポートする日本のコンテンツになっています。同社のディレクター、エドゥアルド・ナバ氏は、「特に人気があるのは、『カーネーション』や『ごちそうさん』などの連続テレビ小説や、京都の風景など日本らしさが随所に出てくるドキュメンタリーですね。アニメ番組は子どもに限らず、大人にも非常に人気があります。大人も見られるよう、



『DOCTORS～最強の名医～』主演の沢村一樹氏。「世界の中での日本の立ち位置が変わってきている昨今、私たち日本人が何を大切に暮らしていくべきなのか、日本のドラマに対する海外の方々の反応から学ぶべきものが沢山あるのかなと感じました」

アニメの放送時間帯は遅めにしています」と話します。「風景・自然・建築物・服装・食習慣・音楽など、メキシコと異なる日本の文化は、私たちにとって非常に魅力的に映ります。連続テレビ小説を見ると、日本の一般家庭の生活や、普段の食事の内容がよくわかります。メキシコの視聴者は遠く離れた日本を訪ねる機会がなかなかありませんから、私たちテレビ局が、日本文化紹介の窓口になっていることに責任と嬉しさを感じています」

テレビを通じて同じ物語に感動すること、あるいは異なった文化に触れることは、遠く離れた国々と日本の距離をぐっと縮めてくれます。日本のテレビ番組は、今後も日本と世界の交流において、大きな役割を担っていくことでしょう。

『俊寛』『アンティゴネ』『桜の園』、 言葉の壁を超えて広がる感動の輪



「Japan 2019」公式企画として
ニューヨークで行われた
『アンティゴネ』の上演風景。
Photo: Stephanie Berger

伝統芸能から現代演劇まで、日本の優れた舞台芸術の紹介を通じ、
国際交流基金は海外の観客と感動を共有してきました。

歴史的な公演が実現するまでには、関係者の不断の努力や熱意があったのです。

眼前の舞台上で生身の肉体が躍動する舞台芸術は、言葉を超えた感動を多くの人に伝える、文化交流の原点ともいえる分野です。国際交流基金(JF)はこれまで日本の幅広い舞台芸術を海外に紹介してきました。JF設立翌年の1973年には、まだ十分にインフラの整わない中、東南アジア3か国で宝塚歌劇団の公演を実現。1979年には、前年に締結された日中平和友好条約を記念して、中国で初となる大歌舞伎公演を主催し、北京市民から大歓迎を受けたことは今でも語り草となっています。1989年にはアフリカ6か国を和太鼓奏者の

林英哲とジャズピアニストの山下洋輔のグループが駆け巡り、2004年には日米交流150周年を記念して宮本亜門演出ミュージカル『太平洋序曲』の実現に協力。日本人が初めてブロードウェイ上演作品を演出した、歴史的な出来事でした。

選りすぐりの演目を最高の演者で届けたいとの思いから、JFが主催する海外公演では、さまざまな制約をバネにして、ときに日本では成立し得ないような芸術的融合・斬新な演出が実現しました。1994年にヨーロッパの4都市で行われた能・文楽・歌舞伎の共演によ

る舞台『俊寛』はその好例です。

日本では考えられないような 企画が実現

背景にあったのは、冷戦の終結と、日本とオーストリアの修好125周年という節目です。それまで日本文化を紹介する機会の少なかった東欧諸国との関係を深めたいというJFの想いと、節目の年にウィーン芸術週間が行う日本特集のタイミングが合致。「三大伝統演劇欧州公演」と銘打ち、ウィーンを皮切りにワルシャワ、プラハ、ロンドンで公演

を行い、来場者は合計で1万人を超えました。

ただ、実現には多くの壁がありました。まず、能・歌舞伎・文楽の共演ということが、前代未聞の挑戦でした。しかし、伝統芸能の担い手には、今を生きる表現者として、新しいことへの挑戦の気概が息づいています。すべての困難を乗り越えられたのは、制作スタッフ・出演者たちの「せっかくの機会なのだから最高のものを見せよう」「とにかくやってみよう」という熱意と努力の賜物でした。総合監修に古典演劇研究者の河竹登志夫氏を、演出に観世栄夫氏という偉才を迎えられたこと、3つの芸能を振興する立場の日本芸術文化振興会が最初の提案者となったことも大きな推進力となりました。

次に、欧州と日本の舞台構造の違いも、装置の制作や演出の上で難問となりました。また当時、JFの拠点は公演地4都市のうちロンドンにしかなく、渡航手配から劇場の確保、現地での舞台装置の製作まで、特別体制を組んで国内外の調整に当たることとなりました。しかし、結果としてこれらの経験は、JFにとって大きな財産となったのです。

『俊寛』は、故郷への想い、別れがもたらす悲しさ、恋しい人を想う気持ちなど、人間ドラマとして時代を超えた普遍性をもつ作品です。そこに能・文楽・歌舞伎それぞれの圧倒的な表現力が加わり、日本人らしい感性、繊細な心持が各国の観客にも確かに伝わったようでした。カーテンコールは毎回8回以上あり、拍手が鳴りやみませんで



1979年、JFは、中国で初となる大歌舞伎公演を主催しました。総勢70名超の公演団員たちは、高級車やマイクロバスなど約20台に分乗し、パトカーに先導された長い車列は、北京市民の大歓迎を受けました。

した。

ウィーン公演を鑑賞したボン大学日本文化研究所のペーター・パンツァー所長(当時)は、JF発行の『国際交流』誌への寄稿で、劇場で隣の席に座った電気技師の若者が仕事場から直行してきたらしいこと、日本演劇に関するシンポジウムを聞き、芸術家たちの話に興味を抱いたこと、そしてもっと日本を知りたいと思っていると語ったことに「心を打たれる思いがした」と述べています。そして寄稿を「俊寛の苦悩は報われた」と結んだのでした。

演劇において普遍的なものを 作りたいという想い

『俊寛』の興奮から四半世紀後の2019年、ニューヨークの観客を熱狂させたのが、気鋭の演出家・宮城聡氏によるギリシャ悲劇『アンティゴネ』です。アメリカでの日本フェスティバル「Japan 2019」の公式企画の1つとしてJFが主催し、宮城氏が芸術総監督を務めるSPAC(静岡県舞台芸術センター)を率いての公演でした。

本公演が実現したきっかけは2017年、JFが助成し、宮城氏が演出したSPACの『アンティゴネ』が、フランスのアヴィニョン演劇祭の開幕作品に選出されたことです。アジア圏の劇団が

オープニングを飾るのは、同演劇祭の70年を超える歴史上初めてのことでした。同演劇祭を、「Japan 2019」での会場となったニューヨークのパーク・アベニュー・アーモリーの芸術監督、ピエール・オーディ氏が観たことで結ばれた縁でした。

『アンティゴネ』の演出について、宮城氏はこう語ります。「アヴィニョンでの会場は、法王庁の中庭でした。当時のヨーロッパの権力の頂点である法王庁には、輝かしい歴史があるのと同時に、満足できない死を迎えた、光があたらない無数の人々の魂が同居しています。浮かばれない魂をねんごろに弔うことが『アンティゴネ』の重要なテーマ。法王庁に存在する無数の魂に、安らぎを与えられればと考えました。一方で、パーク・アベニュー・アーモリーも元は南北戦争を北軍として戦った連隊の軍事施設だと知った時は、不思議な巡り合わせだと思いました。ここも、栄光の下に死者が集まる場所だったのです。フランスからアメリカへとご縁をつないでいただいた国際交流基金には、本当に感謝しています」

「死ねばみな仏」という日本の死生観と「死ねばみな同じ」という『アンティゴネ』の台詞に相通ずるものを感じたと、宮城氏は話します。三途の川を想起させる水や照明の作り出す影など、



『俊寛』のウィーン公演でのカーテンコール。ロンドンの「デイリー・テレグラフ」紙は、公演の最後に、能と歌舞伎と文楽の演者が演じる3人の俊寛が同時に舞台上で登場する場面について、「この瞬間、われわれは、これら3つの古典的な演劇形

式にまったく異なった力があることを知るだけでなく、同じ状況に対する3つの異なる洞察を同時に与えられた。このステージに到達するまでに600年かかったが、待つ値打ちはあった」と評しました。



宮城聡氏は2007年にSPAC(静岡県舞台芸術センター)芸術総監督に就任。『アンティゴネ』は2017年のアヴィニョン演劇祭のオープニング作品に選ばれています。
Photo:©Ryota Atarashi

「Japan 2019」での『アンティゴネ』公演の様。会期中にはニューヨークの公立学校の生徒を招待する教育公演日もあり、舞台上に引き込まれた生徒たちが大きな拍手を送っていました。Photo:Stephanie Berger



舞台上のすべてが観客の心に響いた結果、ニューヨーク公演は2日目にチケットが完売。ニューヨークで日本の演劇作品が1万人以上の観客を動員したのは史上初めてのことで、『タイム』誌は本公演を「2019年の演劇ベスト10」の1つに選出しました。

文化の違いを超えた大きな感動を共有する場として、舞台芸術が国際交流に果たす役割とは何でしょうか。宮城氏はこう述べます。「演劇は母語に縛られ、肉体に縛られ、育った土地の気候風土に縛られる、最も地縛的な表現形態であり、最も普遍的になりにくい分野とも言えます。それでも私は、そこに普遍的なものを創りたいのです。なぜなら、人間の笑い方は、みんな同じはずです。ならば、人間が共感しあえる可能性はあるはずなのです」

舞台芸術を通じた国際交流の可能性を探る場として、国際共同制作があります。宮城氏率いるSPACは2021年、JFが導入した舞台芸術国際共同制作事業の一環として、フランス人演出家のダニエル・ジャンヌトー氏と共に、静岡芸術劇場でチャーホフの『桜の園』を上演しました。コロナ禍によって減少したアーティスト同士の議論や接触の機会を維持すると同時に、舞台芸術が持つ新たな可能性を拓けることを目的として始まったプログラムで、創造の過程を可視化するための、オブザーバー制度を導入しているのも特徴です。

オブザーバーが第三者の立場から共同制作の現場を記録してまとめた報告書は、JFのウェブサイトで公開されています。

『桜の園』はSPACと深い縁を築いているフランス国立演劇センター・ジュヌヴィリエ劇場との共同制作で、コロナ禍によるさまざまな制約下、公演に漕ぎつきました。来日後2週間の隔離を経てまでもジャンヌトー氏をはじめフランス側のスタッフを招へいたのは、文化交流の回路を閉ざしてはならないというJFとSPACの想いの表れです。ジャンヌトー氏も想いは同じでした。「国際交流基金やSPACの支えによりこの国際共同制作が実現したのは、ひとつの勝利であり、希望を与えるものだと感じています。どのような状況下でもクリエイションを行うこ

と、そして国や民族を超えた交流をあきらめてはいけないと信じています」と、開幕に寄せてコメントを出しています。

『俊寛』『アンティゴネ』『桜の園』のいずれも、出演者、また制作者の間に深い信頼関係が結ばれたことで、後々まで語り継がれるような舞台が成立しました。また、すべて古典的な作品でありながら、物語の持つ普遍性が、国や時代を超えて、現代人の心に強く訴えかけた点も共通しています。観客と演者が時間と空間を共有する、その一期一会の奇跡こそが舞台芸術の醍醐味です。感動を生むアーティストたちの素晴らしい才能をつなぐ結節点として、JFは今後も舞台芸術公演の灯を掲げ続けます。

2021年、舞台芸術国際共同制作プログラムに採択され、静岡芸術劇場で上演されたSPAC 秋→春のシーズン2021-2022 #2『桜の園』。©三浦興一



カイロ大学から花開いた中東の日本語教育、 国際交流基金と共に歩んだ50年の軌跡



2013年4月28日にカイロ大学文学部で実施された「日本語弁論大会」の様相。初級の部(2年生)5名、中級の部(4年生)9名の合計14名が参加しました。

中東地域の日本語教育は、国際交流基金の支援で
エジプトのカイロ大学が開設した日本語日本文学科を中心に発展してきました。
中東で実を結ぶ日本語教育や日本文化研究の軌跡をたどります。

日本がオイルショックに見舞われた1973年、当時の三木武夫副総理が中東諸国歴訪の一環で、エジプトを訪れたことをきっかけとして、翌1974年、同国の最高学府であるカイロ大学文学部に中東・アフリカ地域で初となる日本語日本文学科が開設されました。国際交流基金(JF)はその当初から、中東における日本語教育の発展に寄与するため、同大学へ日本語教育専門家の派遣を開始し、一時期には1年に4名体制としたこともありました。

その後、中東での日本語教育需要の

高まりを受けて、1989年からカイロ大学はエジプト国内外の他機関に日本語講師を派遣するようになり、1994年には大学院を開設し、博士号の取得者も輩出します。加えて、JFカイロ日本文化センターが1995年に設立され、同大学に対する日本語教育支援体制はいっそう強化されました。

2000年代以降になると、カイロ大学の先生方の手により、日本文化に関する著書や訳書、日本語学習教材が多数、出版されます。2010年には、同大学の講師陣4名が翻訳を担当した『基礎日

本語学習辞典』のアラビア語版がJFより刊行されました。それまでアラビア語話者のための実用的な日本語学習用辞典がなく、日本語学習者にとっては長く待ち望まれていたものでした。

JFの継続的な支援と現地の先生方の努力によって日本語教育の環境は着実に整っていき、その効果はサウジアラビアにも波及していきます。JFからの日本語専門家の派遣は2010年度で終了し、同大学は日本語教育機関として自立を遂げました。アラビア語圏の日本語教育における同大学の大きな成



カラム・ハリール・サーレム (Karam Khalil Salem) 先生。カイロ大学文学部日本語日本文学科名誉教授。文学博士。2003～2005年、2009～2015年の8年間、同学科の学科長を務められました。エジプト国内外の教育機関で日本語学科設立に貢献するなど、中東の日本語教育の発展に寄与しています。

果を顕彰し、JFはカイロ大学文学部日本語日本文学科に対して、2011年度の国際交流基金賞を授与しました。

カイロ大学では、日本文学の研究を志す学生も増加

共に50年に及ぶあゆみを進めてきたJFとカイロ大学文学部日本語日本文学科との絆について、同大学の名誉教授で、かつて駐日エジプト大使館の文化参事官も務められたカラム・ハリール先生にお話を伺いました。「カイロ大学にはサウジアラビアやシリア、アフリカ各国から多くの留学生が日本語を学びにやってきます。また、国際交流基金からも当大学からも、アラビア語圏の他の大学に対して日本語教育専門家が派遣されています。加えて、当大学では日本語弁論大会や日本語に関する国際シンポジウムなどを、国際交流基金のご支援で定期的で開催してきました」。カラム先生も1993年から2002年まで同大学からサウジアラビアのキングサワード大学へ派遣され、同地の日本語教育の環境整備に尽力されています。

カラム先生は、学生たちが日本語を学ぶ動機の変遷をこう語ります。「観光業が盛んな国なので、初期にカイロ大学で日本語を学ぼうと志す学生の多くは、観光ガイドや旅行代理店への就職を考えている人が多かったです。一方で、純粋に日本文化に関心の高い層もいて、1980年代に中東でも大ブームになったドラマ『おしん』や、1990年代に放映されたアニメ『キャプテン翼』などの影響で日本語を学びたいという機運が高まりました」

2018年にJFが行った調査では、同学科に在籍する学生は110名でした。「卒業生には、日本の大手企業に就職して幹部となった人もいます。アラブの春やコロナ禍で観光産業が落ち込み、ガイドたちの中には日本語教師の資格を取るために再び大学で勉強を始める動きもあります。また、アラビア語による日本文化や日本文学についての教科書が次々と制作されたことも影響したのか、文学研究を希望する学生が増えました。川端康成や大江健三郎はよく知られていますし、村上春樹の人気はやはり高いです」。エジプトでも女性の社会進出が進み、日本文学科には女子学生が多いそうです。「日本の近現代の女性作家、たとえば樋口一葉や吉本ばななを研究する学生もいます」

今後もエジプトの人々に日本への関心を高めてもらうため、何が必要かをカラム先生に伺うと、「双方が留学生を増やし、交流を深めること」が挙げられました。「もう1つ、かつて『おしん』が

日本や日本語への関心を高めたように、良質な日本のドラマがもっと放映されるようになるといいのではと思います。どこの家の居間にもあるテレビは、一般の人が日本に親しみを抱くきっかけとして大きな力があるからです」

日本語の教科書に挟まれたコラムが人気に

カラム先生も教鞭をとったサウジアラビアでは、1994年にキングサワード大学で日本語専攻課程が開設されたことから、日本語教育が広がっています。同大学で日本語を教えるファーリス・シハーブ先生は、こう振り返ります。「当時、キングサワード大学言語翻訳研究所が外国人材を育成するために各国に要請を出し、日本からは国際交流基金が1993年8月に日本語教育専門家を派遣してくださいました。かつてカイロ大学で日本語を学んだ私は、1994年からキングサワード大学で日本語教育に携わっています」

サウジアラビアで日本語を学ぶ人は、何をきっかけに日本に興味を抱くのでしょうか。ファーリス先生はこう述べます。「日本製品の高い評価や高度経済成長時の経済力、日本アニメの人気などにより、日本のイメージは良好です。日本語や日本文化そのものへの興味から、日本語学習につながっているようです。また、学生の一部には、



カイロ大学文学部日本語日本文学科では毎年、日本人の交換留学生を受け入れています。写真は2010年、文化体験の一環で、日本人留学生とカイロ大学の学生に対し、当時エジプトに滞在していた大エジプト博物館保存修復センターの日本人専門家を招いて行った講義の様式。カラム先生が専門家を紹介しているところです。



ファーリス・シハーブ (Faris Shihab) 先生。キングサワード大学教授。筑波大学で博士号取得。2015年、中東諸国と日本の相互理解の促進に寄与した功績が認められ、旭日小綬章を受章されています。



キングサワード大学で教壇に立つファーリス先生。

誤解されがちなイスラム教について日本語で紹介できるようになりたいという気持ちがあることが、以前取ったアンケートの結果に表れていました。これは、聖地メッカを有するサウジアラビアならではの外国語学習動機です。イスラム教についての客観的で正確な情報を日本に紹介することが、サウジアラビアに生まれた者の使命だと考えられているからでしょう」

ファーリス先生やカラム先生などが中心となって制作した『アラブ人のための日本語』は、アラブ圏の日本語学習者向けに作られた初の本格的な教科書です。制作にあたって最も力を注いだ点を、ファーリス先生に伺いました。「一番は、異文化理解です。学習していく中で自然に異文化理解が深められ、日本語で自分の文化についても紹介できるように工夫しています。また各単

元の終わりに載せたコラムも好評です。日本人とより円滑なコミュニケーションを図れるように、各単元で学ぶ会話文に出てくる内容に関係のあることを載せています。花見の会話文を学ぶ単元では桜と日本人について書き、食事について学ぶ単元では日本料理の紹介をする、といった具合です。学習者の家族がコラムを読んで、自分も日本語を勉強したくなったと語ったとも聞いています」

ファーリス先生は、これからサウジアラビアに日本語学習者を増やすた

め、必要なのは「スタッフや教材の確保」だと話します。「これまで日本語教育を続けてこられたのは、国際交流基金とのつながりがあったからです。日本語教師の派遣や教材助成などの支援がなければキングサワード大学日本語専攻課程は存続できなかったと思います。改めて感謝の意を表したいです。今後は、大学で日本語を学んだ学生が訪日できる機会をもっと探していきたいと思います。また、卒業後、日本語が活かせる就職先の確保も重要です。日本大使館が日本文化紹介イベントや弁論大会を開く際に、日本企業と学生との接点を設けてくださって、そのような協力が非常にありがたいです」

現地の先生方の努力と熱意に支えられて、日本語教育の種は中東で花開きました。JFは今後も世界各地の日本語教育が発展するよう支援を続け、日本語教育を通し、日本や日本の文化に親しみを感じてくれる学習者が、さらに増えていくことを期待しています。



『アラブ人のための日本語』には、日本を訪れた際に実際に使える例文がたくさん用意されています。日本文化や日本語についてのコラムもあり、読み物としても楽しめる内容になっています。

海外の日本語教師たちの第二の故郷、 日本語国際センターが提供する研修事業



日本語教育の振興にとって、海外で活躍する日本語教師たちが果たす役割は重要です。自らのキャリアを磨き続ける先生方を、国際交流基金の日本語国際センターが研修事業で支えます。

日本語を学ぶ機会を世界に広げるには、優れた日本語教師の存在が不可欠です。国際交流基金(JF)が2018年度に行った調査では、世界の日本語教師の数は約7.7万人。調査を開始した1979年の18.9倍となりました。ただ、教える技術の向上は常に必要とされます。JF



埼玉県さいたま市にある日本語国際センター。世界各地の日本語教育教材・関連資料を網羅的に収集している日本語教育専門図書館も備えています。

では1989年、埼玉県さいたま市に開設した日本語国際センター(NC)や、海外の拠点で、海外の日本語教師を対象としたさまざまな研修や支援を行っています。

専用施設と専任講師を備えたNCの開設以降、研修参加者はのべ1万人以上にのぼり、世界中で修了生たちが活躍しています。NCでは参加者を公募する長期・短期の訪日研修のほか、相手国政府・教育省等との連携により特定の国・地域を対象とした国別研修、他機関との共催で行う研修、オンライン研修などが実施されています。

公募研修には現在、若手教師を対象とし総合的にレベルアップを図る「基礎研修」、日本語力のさらなる向上を目

指す「日本語研修」、2年以上の教授経験者を対象に、教える力の向上と異文化理解教育能力の養成を目指す「教授法総合研修」等があります。訪日研修の参加者は、NCに滞在して集中的に研修を受けます。研修中は、NCの教室で世界中の日本語教師と一緒に刺激を受けながら学べる授業のほか、地方視察研修や学校訪問、いけばなや書道・茶道などの文化体験の時間もあります。コロナ禍を受け、2020年度にはオンライン研修も始まりました。

NCで得たことは、 学ぶ側の気持ち

では、実際に研修を受けた教師のみなさんの声を聞いてみましょう。まずはカンバラエヴァ・チョルボン先生です。勤務先は、カザフスタンの人材育成支援および日本・カザフスタン両国の相互理解促進を目的として2002年に



2016年、JF 講座講師研修修了者フォローアップ会議 (NCにて)でのチョルボン先生の研修風景のひとコマ。目的別サポートコースの設計についてグループ発表をしているところ。

開設された、カザフスタン日本人材開発センター(KJC)。先生はここで、2012年春に始まったJF 日本語講座のマネージャーを務めています。

カザフ国立大学で日本語の勉強を始めた先生は、アルバイト先だったKJCに就職します。教材作成の手伝いをしながら日本語教師になる勉強を始め、教授法総合研修に参加するためNCへやってきたのは2011年5月。東日本大震災のわずか2か月後でした。「もちろん迷いました。家族も反対でした。でもせっかくのチャンスだし、と行ってみたら、自分の家族を心配するよりも他人の命を助けることを優先した被災者のことをニュースで見て、とても心を打たれました。どうしてそんな行動ができるのかを知りたくて、たくさんテレビのニュースを見ました。今では、いい時期に日本に行けたと思っています」

そのころ、外国語教育の国際標準を踏まえてJFが作成したのが「JF 日本語教育スタンダード」です。これは日本語の教え方・学び方・学習成果の評価の仕方を考えるための枠組みであり、コースデザイン、授業設計、評価に役立てられています。「NCでの研修もこれに則り、毎日、自分の行った模擬授業を3段階で評価してコメントを書くよう言われました。これが帰国後に役に立ったのです。ちょうどKJCでも、JF 日本語教育スタンダードに則ったプログラムを組む予定でした。NCでは学ぶ側だったので、なんで毎日こんなことをしなければならないのかと疑問に思っていたのですが、帰国して教える立場になって、その意義がやっとわかりました。学ぶ側に回った経験が、今と

ても生きています」

その後も、訪日研修には何度も参加。参加者同士で経験を共有し、学んだことを帰国後に教える側として実践しています。「日本語講座を運営する立場として、カリキュラムの作成やコースデザインの勉強もできたことが役に立っています。いずれは研修修了者のネットワークを作って、私たちの体験を後輩たちに伝えていきたいです」

キャリアパスを切り拓き、 経験を積みながら訪日研修へ

次に、ドイツにおけるJFの拠点、ケルン日本文化会館で専任講師を務めるカタリーナ・ドゥツス先生にも話を聞きました。2007年、先生はNCで「日本語教育指導者養成プログラム(修士課程)」を受講しています。これは、各国の日本語教育界において指導的立場に立つ人材を養成するべくNCと政策研究大学院大学、国立国語研究所が連携し、2001年に始めた研修です。先生は、長いキャリアの中で多くの研修を経験してきました。

ただ、先生が専任の日本語教師になるまでには紆余曲折がありました。子供の頃、日本人の親友と交流する中で日本に興味を持ち、大学では日本語を専攻、本格的に日本語を学び始め、大学院入学後に1年間、日本へ留学。卒業後は国際交流員として石川県の町役場で3年間、働きました。そこで日本人にドイツ語を教える機会をもち、言葉を教える楽しさに目覚めた先生は教師の道を考え始めます。「日本語は、言葉として面白いと感じました。ただ当時す

にドイツには日本語を教えるネイティブの先生がたくさんいたので、将来、日本語教師の職に就けるか不安でした。帰国後はノルトライン・ヴェストファーレン州立言語研究所で日本語教師の勉強を始めるかわら、プライベートで日本語を教えていました。2005年に運よく、以前から図書館でアルバイトをしていたケルン日本文化会館の非常勤講師になれたのです」

そんな折、先生は日本語教育指導者養成プログラムのことを知り、2007年に参加します。「少人数で濃密な授業を受けられ、とても贅沢な時間でした。研修で一緒だったアジアの先生たちからは、就職を目的とした日本語学習へのニーズが高いこと、日本語教師としての職を得る機会も多いことを聞いて、うらやましかったです」

帰国後、先生は多い時は4つも非常勤の職をかけもちしながらキャリアを磨き、2011年、ついにケルン日本文化会館の専任講師となりました。「これからはケルンで日本語教師の育成に力を入れていきたいです。また、コロナ禍が落ち着いたら、日本文化体験コースや学校を訪問して日本語を教える活動を再開したいです」と、抱負を語ってくれました。

日本語教師のみなさんの、学びへのたゆまぬ情熱こそが、世界に日本語を広げていく原動力となっています。経験や知識の豊富な各国の教師も参加するNCでの研修は、研修生同士、また研修生と講師の学び合いの場でもあります。NCは海外で活躍する日本語教師の第二の故郷として、訪日される先生方を温かくお迎えします。



2017年、「ケルン美術館の夜」という夜間のイベントで、ドゥツス先生はケルン日本文化会館で日本語体験講座を担当しました。

アジアで日本語を学ぶ中高校生たちに、 生きた言葉と文化を届ける 「日本語パートナーズ」



日本語教育が行われているアジアの国々に日本人を派遣し、
現地校の授業をサポートする「日本語パートナーズ」。
2014年から始まった新たな国際交流の形は、
コロナ禍も乗り越えて続いています。

東南アジアを中心としたアジアの中学・高校等に派遣され、日本語の授業のアシスタントや日本文化の紹介役を担う「日本語パートナーズ」の存在をご存じですか？ 国際交流基金（JF）では、2014年から2021年までの8年間に、インドネシア・カンボジア・シンガポール・タイ・台湾・中国・フィリピン・ブルネイ・ベトナム・マレーシア・ミャンマー・ラオスの12の国と地域に約2500名の日本語パートナーズを派遣しました。2022年もまた多くの日本語パートナーズが、アジアの国々に旅立つ予定です。

日本語パートナーズは、派遣先によ

多様な経歴をもつ日本語パートナーズは、等身大の日本人の姿を伝えるのにぴったりの存在。派遣先の地域の人々にとっては初めて出会う日本人となることも。

って一部要件が異なりますが、①満20歳から69歳で日本国籍を有すること、②日常英会話ができること、③派遣前研修（約4週間）の全日程に参加できることなどを要件として広く一般から公募され、日本語教育の知識や経験は求められません。書類や面接による選考を通過すると、派遣前研修を経て、1年未満の期間派遣されます。



なぜ、日本語教育の専門家ではない日本語パートナーズを派遣するのでしょうか。背景としては、もともとアジア地域では第2外国語教育が盛んで、日本語も一定の人気があったことに加え、2000年代に入り、ポップカルチャーなどを通じて日本語に関心を持つ若者がさらに増えたことや、日系企業の進出が進んだことなどが挙げられます。



フィリピンの首都マニラの貧困地域であるトンド地区に派遣された玉置さん。週4日12コマの日本語授業に加わり、生徒たちが楽しみながら日本語や日本

文化を学べるよう心を砕きました。現地で知り合った人々とは、今でもSNSでメッセージのやり取りをする仲だそう。

こうして、中等教育レベルでも日本語教育が盛んになりましたが、急速な拡大に対し、教師の数や、日本人と直に接する機会は、現在でも、追いついていません。

JFでは、以前から日本語教育の専門家を各国に派遣し日本語教育機関への支援を行ってきましたが、さらに広範囲に、より身近に、日本語学習のパートナーとなる日本人が教育現場に居ることが、各国の日本語を学ぶ生徒、教師の応援となっているのです。

生身の日本人が、 現地へ赴くことの意味

「日本語パートナーズ事業は、日本語や日本文化への理解を深めるにあたり、非常に戦略的で素晴らしい手法だと感じました」と語るのは、2014年の本事業開始当時、インドネシア共和国教育文化省の中等教育総局長を務め、責任者として事業実施のための協定書に署名したアフマド・ジャジディ氏。「言葉や文化は人から人、口から口へと伝えるのが大事です。日本語パートナーズとして、生身の日本人がインドネシアの高校に派遣され、言葉だけにとどまらない日本人らしさを伝えてくださることに期待しました」

1980～90年代にかけて日本への留

学経験があるジャジディ氏は、未来の働き手である自国の若者たちへの日本語教育の必要性を強く感じていました。また、インドネシアは国土が広く島が多いため、地域による教育格差の問題を抱えています。その点、地方へも派遣される日本語パートナーズは、とても貴重な存在なのです。

日本語パートナーズのミッションには、現地の言語を習得し、文化を理解して、その経験を広く発信することも含まれています。「わが国に多いイスラム教徒は、怖いとか恐ろしいという色眼鏡で見られることが少なくありません。日本語パートナーズ事業は、日本人にとっても、そのような偏見を取り除き、本当のインドネシアを知っていただくための良い仕組みだと思います」とジャジディ氏は話します。

ジャジディ氏の言葉通り、日本語パートナーズは多くの派遣先で、旅行とはまったく異なる文化交流体験を重ねています。2019年7月から約8か月間、フィリピンの首都マニラに派遣された玉置千郁さんもその1人です。派遣前は不動産関係の仕事をしていた玉置さん。旅行でフィリピンを訪れたことはありましたが、「現地の高校に入り込んで生活する中で、その土地の暮らしや、家族・友人を大切にするフィリピン人の国民性など、今まで知りえなかった

多くのことを学びました」と語ります。学校では日本語パートナーズの活動があくまでもサポート役であることを念頭に、日本語の発音練習や板書、文化紹介を担当し、受け入れ担当の先生が授業をしやすいよう心がけました。

双方向の異文化理解が もたらす効能とは？

「派遣後は、私自身ひと皮むけたように思います。現地では時間通りに物事が進まなかったり、突然何かを任せられたりすることがよくあったので、物事に臨機応変に対応できるようになりましたし、小さいことを気にしなくなりました」と玉置さん。彼女はいま特定技能制度関連のサポート会社に勤め、技能実習生として来日するフィリピン人たちの指導にあたっています。「彼らとスムーズに会話できるのも、どういうふうに日本語や日本文化を伝えれば良いかがわかるのも、日本語パートナーズを経験し、フィリピン人やフィリピン文化についての理解を深めたおかげです。今後はその恩返しをしたいと思っています」

アジア各地の日本語教育機関そして日本語学習者からの、ますます膨らむ期待とニーズに応えるため、日本語パートナーズ事業は今なお継続されています。オンラインで容易に世界とつながることができる時代だからこそ、日本語パートナーズのような人と人のリアルなつながりの価値はかえって高まっているのかもしれない。



アフマド・ジャジディ(Achmad Jazidie)氏。現在は、インドネシアのナフダトゥール・ウラマ大学スラバヤ校学長を務めています。「事業を今後も継続し、もっと多くの日本語パートナーズを派遣してほしい」と語ります。

米国人研究者が解き明かす、 『源氏物語』の奥深き世界



2019年に開催された『源氏物語』展 in NEW YORK～紫式部、千年の時めき～の会場、メトロポリタン美術館の正面玄関ホールに掲げられた同展のバナー。



メリッサ・マコーミック (Melissa McCormick) 先生。ハーバード大学アンドリュー・W・メロン日本美術文化学教授。『源氏物語』と前近代日本の芸術・文学の第一人者。日本の中世の絵巻に関する数多くの論文を英語と日本語で執筆し、文学作品の考察や解釈の範囲と方法を広げています。1995年、2013年の二度にわたりJFのフェローとなりました。Photo by Martha Stewart

国際交流基金では日本と世界の良い関係を発展させるため、幅広いプログラムを通じて世界の日本研究者を支援しています。その成果はさまざまな形で日本への深い理解を促進しています。

国際交流基金 (JF) の事業の3本柱の1つである「対話」には、「日本研究」と「国際対話」の2つが含まれます。JFは創設以来、海外の日本研究者を支援するとともに、各国の有識者に日本との対話を深めてもらうためのシンポジウムや共同プロジェクトを実施してきました。また、国際的な課題の解決に向けた人的ネットワークの形成を促進することも、JFの重要な取り組みの1つです。

長きにわたって日本と海外との相互理解の深化に寄与する日本研究者を増やすため、JFは「日本研究フェロシップ」プログラムを立ち上げ、日本研究に携わる学者・研究者を日本に招へいし、研究・調査を行う機会を提供してき

ました。対象となるのは、人文・社会科学分野の学者や研究者、そして博士論文を執筆する大学院生です。これまで7000名近い研究者がフェローとなって訪日を果たしました。

日本で学び、研究分野以外の勉強の大切さに気づく

2019年、アメリカで開催された日本文化フェスティバル「Japan 2019」の幕開けとなった展覧会を監修した、ハーバード大学のメリッサ・マコーミック教授も、1995年と2013年の二度にわたるJFのフェローです。その展覧会とは、JFがニューヨークのメトロポリタン美術館と共催した『源氏物語』展 in

NEW YORK～紫式部、千年の時めき～。マコーミック教授と同館のジョン・カーペンター学芸員とが監修し、国宝2点、重要文化財9点を含む絵巻物、掛軸、屏風、書跡、漫画作品まで138点が一堂に会しました。『源氏物語』がテーマの海外展では過去最も包括的な内容となり、「ニューヨーク・タイムズ」紙や「ワシントン・ポスト」紙などの評価も高いものでした。来場者数は21万人を超え、日本ファンの新規開拓にも貢献したといえます。

マコーミック教授が『源氏物語』に興味を抱いたのは、学部生としてミシガン大学に在籍中のこと。英訳を読み、「源氏物語絵巻」を知って、文字(詞書)と絵(イメージ)が相互に関連し、絡み

マコーミック教授が共同監修を務めたメトロポリタン美術館での『源氏物語』展 in NEW YORK～紫式部、千年の時めき～では、国宝も展示されました。右はその1つ、依屋宗達筆「源氏物語関屋滯標図屏風」(静嘉堂文庫美術館蔵)に見入る来場者たち。



合っている複雑さに魅了されたといいます。大学院では日本語の古語を学び、くずし字や変体仮名の知識も得ていきました。「翻訳を読んで意味をつかむのも大事ですが、やはり最も古い写本にあたり、紫式部が何を伝えようとし、読者が何を理解したかを考察するのがいちばんです。何かを表現するのに紫式部がどんな語をあてているのか、そこに個性が光るのでから」と、教授は語ります。

1995年、教授はJFのフェローとして訪日します。当時は博士論文の執筆中で、メンターとなったのが学習院大学の千野香織教授でした。『源氏物語』を研究するなら、建築を含むさまざまなコースもとったほうがいい」との千野教授のアドバイスで、建築史を専門とする神奈川大学の西和夫名誉教授の授業を選択しました。マコーミック教授は当時をこう振り返ります。「西先生とはたくさんの思い出があります。2月の京都でいろいろなお寺を回って障子に使われた紙のサイズを測ったり、特別に二条城を案内していただいたり



漫画の原画がメトロポリタン美術館で展示されるのは初めてでしたが、『あさきゆめみし』の原画の展示された一室では、多くの観客が長い時間をかけて細部にまで目を凝らしていました。マコーミック教授と大和和紀氏(写真左)を招いてのトークイベントも開催され、大和氏からは、平安時代の建物や小道具、装束を描くための参考資料の入手にまつわる苦労話も語られました。

しました。それらの経験を通じて、日本画と空間の関係性を知り、私は自分の研究以外の分野を学ぶ大切さに気づいたのです」

二度のフェロー経験を活かし、『源氏物語』展を成功に導く

2013年にはハーバード大学教授として、再びJFのフェローとなり来日。その後も美術史の研究者として、美術と文学の相互関係に焦点をあてながら、絵画形式から社会史、また美術作品が制作された意図について、学際的なアプローチでより広く深く研究に取り組んでいくことになります。そんなマコーミック教授の幅広い視野が存分に発揮されたのが、2019年のメトロポリタン美術館での展覧会『源氏物語』展 in NEW YORK～紫式部、千年の時めき～でした。

マコーミック教授はこう語ります。「日米の同僚たちと協働し、国宝や重要文化財も含め、138点にもものぼる展示品をニューヨークに持ってこられたのが嬉しかったです。展示は『源氏物語』の受容の歴史にも焦点をあて、時代と共に人々がこの物語をどう受け止めてきたかを見せました。また、『源氏物語』になじみがない来場者に、これが表層

的な恋愛物語ではないことも知ってほしかった。もちろん恋愛の要素もありますが、宮廷生活や権謀術数なども描かれ、長きにわたって日本の文化や社会に影響を与えてきたものなのです」

『源氏物語』の世界は現代語訳のみならず、能や宝塚、アニメなど、日本ではさまざまな媒体で表現され、そのつど多彩な解釈が生まれてきました。その中でも特に、多くの人々に親しまれているのが、大和和紀氏の漫画『あさきゆめみし』です。今回の展示では、大和氏による原画を紹介する展示室も作られました。会期中に行われたマコーミック教授とのトークイベントで、大和氏はなぜ『源氏物語』を漫画化したのか問われ、「一枚の絵ですべてを一瞬にしてわかってもらえるのが漫画。『源氏物語』は千年以上も昔に書かれた長い長い小説ですし、登場人物も多く、古典文学なので現代人が読むには根気がいります。けれど漫画ならば、この面白さを多くの人に伝えられると考えました」と述べています。

JFのフェローならではの日本への深い理解と情熱が、『源氏物語』をまったく知らない来場者にも、この物語をよく知る人たちにも本展を新鮮なものとし、21万人超という動員数につながったといえます。フェローシップの意義とは、海外における日本研究を振興し、知日派を増やすこと。そして彼らの興味・関心を知ることは、日本人にとっては今まで気づかなかった自国の個性を知ることにもつながります。多様な人々による多彩な日本研究が、さらなる日本の魅力を世界に発信していくことを期待したいと思います。



マコーミック教授はハーバード大学で、1年生を対象に「人文学10」という通年のクラスを担当しています。授業は文学のみならず哲学や宗教や伝統文化などに関する、世界に影響を及ぼした名著について教えるもので、『源氏物語』をはじめホメロスからヴァージニア・ウルフ、W・E・B・デュボイスまで幅広く取り上げています。©大和和紀/講談社

「心連心」——若者世代が心と心をつなぎ、 広がりつつける日中友好の輪



日本と中国の青少年がともに過ごすことで、互いを理解し、友情をはぐくむ。
国際交流基金では、長期招へいや協働イベントなど
さまざまな交流プログラムを実施し、
未来の日中関係を担う若者たちの対話を促進しています。

国際交流基金(JF)は、2006年に、日本と中国の次世代を担う若者たちのより深い交流を目的に、「日中21世紀交流事業」を開始し、担当部署として「日中交流センター」を新設しました(2022年4月に「国際対話部」に改編)。前年の2005年は、日中関係が急速に冷え込み、中国各地で大規模な反日デモが巻き起こった年。しかし一方で、多くの中国の若者たちは日本の漫画やアニメ、テレビドラマやファッションなどのポップカルチャーに魅了されていました。日々のニュースで浮かび上がる厳しい両国関係と、日本発のコンテンツに向けられる熱いまなざしとの間には温度差があったのです。また、経済

成長が著しい中国社会のリアルな姿を、日本の若者が直接的に知る機会も、なかなかありませんでした。このような背景のもと、日本と中国の若者が直接対話し、互いに学びあう機会をつくるのが、未来志向の両国関係を築く第一歩として求められていました。

新しい世界に憧れ、 つかんだ日本留学のチャンス

「日中21世紀交流事業」では、心と心をつなぐという意味の「心連心(xin lian xin)」を合言葉に、さまざまな活動が展開されています。主要事業である「中国高校生長期招へい事業」は、日

本語を学ぶ中国の高校生が約1年間日本に滞在し、ホームステイや寮生活をしながら日本の高校に通うプログラム。このプログラムの第4期生として2009年来日した1人が、劉思好さんです。

劉さんが日本語を学び始めたのは2005年、中学1年生の時でした。多くの日系企業が中国に進出していた頃で、劉さんの実家のテレビも日本製になりました。高校生になり、このプログラムに応募したのは「新しい世界への憧れがあったから」だと、劉さんは語ります。「私の世代は、今よりももっと外の世界の知識に飢えていて、だけど外国に留学できる人はまだ少数。本当に豊かな一握りの家庭に限られた特権でした。だから、選抜されれば公費で留学できるこの機会を逃すまいと、迷わず



2006年に第1期生として来日した中国の高校生たち。2019年度までに、14期にわたり総勢442名の高校生が来日しました。



中国18都市にある「ふれあいの場」では日本の最新情報を提供しているほか、日中の若者が交流する事業が行われています。写真は、2020年に成都ふれあいの場で開催されたイベントの様子。

チャレンジしたんです」

劉さんは試験に見事合格し、35人の同期と一緒に来日。留学生は北海道から沖縄まで日本各地に分散しますが、劉さんが派遣されたのは富山県高岡市でした。「東京に憧れていたし、富山がどこにあるかもわからず、最初は不安で戸惑いました。でも、今から思えば、とても得難いチャンスでした。富山に住んでいたと言うと珍しがられるので、今も話の引き出しとして役に立っています」

富山弁の壁を乗り越えた先にあったもの

通った富山の高校では、外国人は劉さん1人。クラスメートには中国語はもちろん、英語で会話できる人もいないため、打ち解けるまでに時間がかかり、悩んだ時期もありました。「自分が努力して日本語で話しかけ、さらには流

暢な富山弁を扱えるようになって初めて、壁を突破できました。みんなが話す富山弁を吸収し、覚えて次の日に使ってみる。するとポジティブに反応が返ってくるので、中国で日本語を勉強していた時よりも実践的で面白かった。そこからは楽しくなって、友達もできたし、茶道部に入って先輩後輩とも仲良くなれました」

日本の高校生にとっては他国から来た留学生の姿が刺激になり、また、幼い頃から学業に邁進してきた中国の高校生にとっては、部活や学校行事に打ち込み、遊びにも時間を割く日本の高校生は新鮮そのもの。目の前にいる同級生への素朴な興味や共感、報道やインターネットで目にする互いの国のイメージをはるかに超えて、互いの心に刻まれました。劉さんはこう言います。「当時は高校生で、自分の世界観をまだ構築できていない時だからこそ、富山弁を含めた新しい文化を素直に受け入

れられる自分がいきました。もし大人になってからだったら、自分の世界観だけで、他国を判断してしまうこともあったかもしれません。どんな文化にも、受け入れられる部分と受け入れ難い部分があると思うから、決めつけずに共存できたら、お互いにとっていいんじゃないかと思います」

日本で1年を過ごした高校生は中国へ帰り、それぞれの道を選択していきます。日本の大学への進学を目指す人、中国の大学に進学する人、アジアの他地域や欧米へ留学する人。劉さんは上海財経大学に進み、ビジネスと日本語を学びながら、JFが中国各地の大学等に開設している「ふれあいの場」を活性化するチーム「F活」にも参加。両国の大学生が協働で文化祭を企画・運営するプログラムで、劉さんもコスプレとメイクのブースを出して盛り上げました。卒業後は東京の大手広告代理店に就職するため再び来日。日系と外資系双方の企業と取引してグローバル戦略に携わるなど、学生時代の経験を糧に活躍しています。

新型コロナウイルスの流行により、2019年度を最後に長期招へい事業は休止中ですが、JFでは2020年度より「日中高校生対話・協働プログラム」と題し、オンラインでの交流を継続しています。日本と中国の若者たちが心を通わせ、互いを知り、理解しようとする。その小さな積み重ねが、日本と中国の友好の輪を広げ、両国の信頼関係を築く礎になることを願ってやみません。



写真左が劉さん。富山のホストファミリーとは10年来の交流が続き、家族の一員として頻りに連絡を取り合う仲だそう。「8月のお盆には毎年富山に帰りますし、その家の子が東京の大学に進学したので、食事に連れていったりしています。東京暮らしは私の方が長いんですよ」(写真は、ホストファミリーの弟と妹との食事の様子)

「互いに学び、互いに強くなる」 スポーツで育まれていくアジアとの絆



ギラヴァンツ北九州がカンボジアに短期派遣された時の模様。写真提供:ギラヴァンツ北九州

国際交流基金では、設立当初からスポーツを通じた
交流事業を行ってきました。

その中から近年、アジアで実施した柔道とサッカーに関する
ユニークなプロジェクトをご紹介します。

言葉に頼らず誰でも気軽に世界の
の人々と交流できる手段、そのひとつが
スポーツです。国際交流基金(JF)では
草創期からスポーツ専門家の派遣事業
を行ってきました。対象地域は東南ア
ジアやアフリカ、中近東など、分野は柔
道、レスリング、体操、バレーボール、
空手などです。1977年度から2001年度
までは、親善試合を主な目的とした20
名前後からなる大型スポーツチームの
短期巡回派遣も主催しました。1981年
度には「中近東スポーツ交流促進特別
計画」が発足し、5年間にわたり、指導
者の長期派遣とともに、剣道や合気道、
サッカーなどの使節団派遣も実施され
ました。

日アセアン JITA-KYOEI PROJECTでは、各国
において将来、指導的立場に立つ若手の指導者た
ちを講道館に招いて正しい理論と技術を教える
国際セミナーを開催。閉講式では修了証の授与
が行われました。取材協力 公益財団法人講道館

その流れを汲んで、近年、柔道とサ
ッカーについてアジアで実施した2つのユ
ニークなプロジェクトをご紹介します。

柔道—— 「自他共栄」の理念で 日本とアセアンを結ぶ

まずは、柔道の「日アセアン JITA-
KYOEI PROJECT」。柔道の創始者・
嘉納治五郎師範の唱えた「自他共栄」と
いう指針——「互いに信頼し助け合う



ことで、自分も世の中の人と共に栄え
る」という精神に則り、JF アジアセン
ターと講道館との共催で、2016年度から
6年間実施したプロジェクトです。「自
他共栄」はまさに、「アジアの人々のあ
いだに共感や共生の心を育む」という
アジアセンターのミッションに通じる
理念。柔道を通じて、日本と東南アジ
アとの文化交流や相互理解を促進する
狙いがありました。

講道館で本プロジェクトを担当した

国際部の大辻広文課長は、こう振り返ります。「アセアンを中心にアジア各国で柔道を教え広めていく、現地の指導者の育成に最も力を入れました。その国の柔道を引っ張る存在となる指導者を育て、彼らを起点に、選手、コーチ、審判員といった層にも教育啓発を広げていくようなアプローチですね」

日本から各国への指導者の派遣に加え、各国から講道館へ若手指導者を招へいしての、合宿形式によるセミナーも実施。指導の合間には、書道など日本文化に触れる時間も設けました。また、各国柔道連盟会長たちとの交流や、指導のための教材映像の作成なども行いました。これは一方通行のプロジェクトではなく、教える側も勉強になるのだと、大辻課長は語ります。「知識や技術を出し惜しみせず伝えていく中で、われわれにも常に学びがあります。国際交流基金と共に、日本と海外との懸け橋として講道館が貢献しつつアジアと世界全体の柔道が進歩していけたら、これほど嬉しいことはないです」

サッカー—— 「ASIAN ELEVEN」が またいた親善の種

もう1つのプロジェクトは、2014年からJFアジアセンターと、公益財団法人日本サッカー協会(JFA)、公益財団法人日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)が推進してきた、東南アジアとのサッカー交流事業「ASIAN ELEVEN」。東京2020オリンピック・パラリンピック大会の開催国として、日本が官民連携で推

ASIAN ELEVENプロジェクトでは、2019年に福島県のヴィレッジスタジアムで親善試合「JapaFunCup」を開催しました。本プロジェクトで指導を受けてきた各国からU-18選手が選ばれ、国を超えた1つのチームを結成し、U-18東北選抜と対戦。みごと勝利を収めました。

Photo: ©JFA



進した国際貢献・交流事業「スポーツ・フォー・トゥモロー」の一環としての事業です。東南アジアの国々とサッカーを通じて良きライバル、良き友人としての関係を育みながら、日本のサッカー界が積み上げてきた知識・経験を共有。レベルアップした「アジアのサッカー」を創ることを目指して、指導者派遣や選手育成に力を入れてきました。

日本サッカー協会・国際委員会の小野剛副委員長はこう語ります。「日本のサッカーはこの30年くらいの間に急速に力をつけ、世界の強豪国とも伍する存在となりました。それを見て『次はわが国だ』と意気込む東南アジア各国の、このプロジェクトへの期待は大きいです。現地での指導は、サッカーのレベルもそうですが、文化や慣習が異なる環境下でいかに選手を育成していくか、その育成システムをどう構築していくかということまで含めたものになります。そんな環境で指導にあたる機会は国内ではないですから、指導する側も得るものが大きい。現地での経験を持ち帰ることは、日本サッカーのレベルアップにもつながります」

もちろん、言葉や文化の壁はありま

す。カンボジアサッカー連盟でテクニカル・ダイレクター(技術委員長)を務め、現地でユース世代やその指導者の育成にあたる小原一典さんは、こう話します。「サッカーの話以前に、組織の風通しを良くすることだけでも大変だったりします。でも、日本のやり方をただ押し付けるのではダメです。相手を理解し、自分も成長できている、幸せになっている、と感じられることが大事。それが真の意味での国際交流にもつながると思うのです」

一方、各国のサッカー関係者の日本への招へいも行われていますが、これはスキルの向上だけでなく人的交流の面でも役立っています。小野副委員長は次のように語ります。「彼らの滞在中には、日本文化を学ぶ機会も設けています。厳選された若手トップ選手や幹部候補生たちですから、帰国後には彼らがその国のサッカー推進の中心になるわけです。人のつながりができれば、コミュニケーションも円滑になる。国際試合で顔を合わせる機会も多いですからね。ともに研鑽を積んだ『絆』が、さまざまな形で生きていきます」

2つのプロジェクトに共通するのは、ともにスポーツの技能向上「だけ」に焦点を絞ってはいない点です。青少年も対象とするだけに、どちらも日本文化に触れる機会や、教育的側面、すなわち「礼儀」や「地域社会との交流」の大切さにも光をあてています。なぜなら、国際交流を通じて生まれるのは、勝ち負けではないからです。得られるのは友情や絆であり、学びを得て互いに成長できることがスポーツの魅力。JFはこれからも、スポーツを通じて世界に懸け橋を築くお手伝いを続けていきます。

このプロジェクトではブータンにも視察を兼ねて指導者を派遣。ブータン柔道協会は2016年に国際柔道連盟に加盟を果たしました。取材協力 公益財団法人講道館



次世代リーダーの育成のために、 日米を結ぶ2つのプログラム



日米次世代パブリック・インテレクチュアル・ネットワーク事業の第5期生(2018年～2020年)の、米ワシントンD.C. 訪問時の集合写真。

国際交流基金は、各国の有識者間の対話を深める事業に注力してきました。日米関係においては、両国の次世代リーダーの育成とネットワーク構築を目指すプログラムが誕生しています。

国際交流基金(JF)では草創期から、世界各国の有識者との対話を促進する事業を続けてきました。ここでは、アメリカとの間でJFが進めてきた有識者間の知的交流を促進するプログラムに焦点をあてたいと思います。

安倍フェローシップ・プログラムの誕生

1980年代後半から1990年代にかけ、貿易摩擦を要因とする対日感情の悪化

が、日米関係に暗い影を落としていました。1990年、日米安全保障条約30周年記念の政府特使としてアメリカへ派遣された安倍晋太郎元外務大臣は、貿易摩擦で高まる日米の緊張関係を、相互理解の促進で乗り越えようという思いから、「日米親善交流基金」の創設を提案します。安倍氏の構想は日米双方の首脳を始めとするリーダー層からも強い賛同を得て、翌年、同基金を活動財源とする日米センターがJFの中に創設されました。

日米センターは、国際社会が直面する地球規模の課題を解決するためには、日米両国の人々が世界の人々と共に知恵を出しあい、協力していく必要があるという考えから、「日米両国の共同による世界への貢献」及び「日米関係の緊密化」をミッションに掲げ、さまざまな日米間の共同研究、対話・連携事業などを支援すると共に、こうした日米のグローバル・パートナーシップを担う人材育成にも力を入れてきました。その中核事業となったのが、「安倍フェ



JFの各プログラムへの助言を含め、日米を中心とした国際相互理解の増進に長年取り組み、多大な貢献をしたファー教授は、2016年度の国際交流基金賞を受賞しました。



スーザン・ファー(Susan J. Pharr)先生。ハーバード大学の名誉教授で、2021年までエドウィン・O・ライシャワー日本政治学教授。32年間、ハーバード大学で日米関係プログラムを統括。日本及び世界の民主主義の社会的基盤に関する研究を続けています。

Photo by Martha Stewart

ローシップ・プログラム」(安倍フェローシップ)です。これは日米の優れた研究者を対象に、現代の喫緊の地球的な政策課題に関する学際的・国際的な調査研究を支援するプログラムで、発足以来447名の安倍フェローが生まれ、特に政策研究の分野において国際的に活躍しています。

「安倍フェローシップの誕生は、世界における日本の地位が高まった結果、もたらされたものだと思います。当時、政策的な議論における日本の重要性が増していたのです」と語るのは、ハーバード大学のスーザン・ファー名誉教授です。日米間の知的交流の深化に尽力している先生は1978年にJFの日本研究フェローとして来日しました。また、1994年度の安倍フェローであり、2016年度の国際交流基金賞受賞者でもあります。

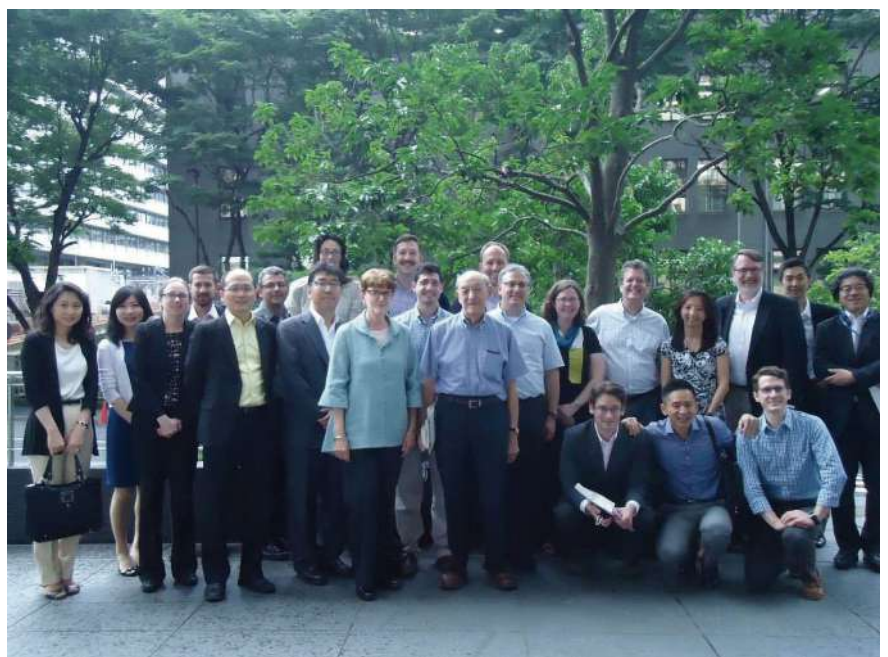
ファー先生はこう語ります。「1980年代から1990年代にかけて日米が貿易摩擦で緊張関係を迎えた当時、アメリカの日本専門家が日本に関する専門知識や歴史的な背景を語ることの重要性が、日米で再認識されました。安倍フェローシップは、学者の声を政策論議に反映させることを重視したプログラムですが、この政策研究分野は競争

が激しく、世界各国がさまざまな奨学金やプログラムをアメリカの研究者に提供しています。その中でも日本は、安倍フェローシップ等を通じて日本専門家や日米関係に従事するリーダーを多数、輩出しており、これは国際交流基金の大きな成功物語と言えると思います」

日米関係の未来を担う 次世代リーダーたち

時代は下り、2009年にJFとアメリカのマンズフィールド財団が共催する新たなプログラム「日米次世代パブリック・インテレクチュアル・ネットワーク

事業(U.S.-Japan Network for the Future)」が立ち上がります。アメリカの政策・世論形成に関与することが期待される中堅・若手世代の日本専門家(研究者、実務家)を対象に、2年の間に数回、日米で合宿形式の研修を行い、日米関係のアジェンダについて理解を深め、同時に彼らの間のネットワークを形成することを目的としたプログラムで、第1期から第6期まで84名が参加しています。ファー先生をはじめハーバード大学名誉教授のエズラ・ヴォーゲル氏ら錚々たるアドバイザー陣が、アメリカに次世代の知日派リーダーを育



日米次世代パブリック・インテレクチュアル・ネットワーク事業の第3期生(2014年~2016年)の訪日研修時の集合写真。中央に立つのが、ハーバード大学のファー教授とヴォーゲル名誉教授。ヴォーゲル教授は惜しくも2020年に逝去されました。

成するという使命感にかられてプログラムが開始されました。

プログラム創設の背景を、ファー先生はこう振り返ります。「結果を出さなければというプレッシャーにさらされている、若い学者や研究者を応援したいという思いがありました。また、若い学者が現実に日米間に存在する政策的な諸問題に向きあい、解決策や意見を表明できるように促す目的もありました。設定した目標は3つです。まず、参加者に日米の政策課題をきちんと知ってもらうこと。次に、彼らのキャリア形成を支援し、異なる研究機関に属する参加者同士をネットワーク化して、互いに協力しあえる関係を築くこと。そして、若手研究者たちに今後も日本研究という学術分野に留まって実績を積み重ねてもらい、活躍してもらうことです」

ファー先生はまた、こう続けます。「このプログラムができたことで、若い世代の日本研究が再び活性化しています。プログラムの強みは、学者だけでなくシンクタンクやNPOなど、政策にかかわる人を幅広く対象としていることです。輩出したいのは未来のリーダー。過去の参加者の中から、シンクタンクで日本専門家として活躍したり、北米における日本研究を牽引する優秀な研究者、政府の要職に就く人が出始めています」

2016年から2018年、第4期生としてこのプログラムに参加したのがジョシ

ュア・ウォーカー氏。現在、ニューヨークのジャパン・ソサエティの理事長を務めています。1歳から18歳までを北海道で過ごした知日家に、参加の動機を伺いました。「18歳になってアメリカに行った時、大学で改めてアメリカのことを学ぼうと思いました。いつか日米の懸け橋になるような仕事ができたらと思っていましたが、広い世界で仕事がしたいとの気持ちもあり、大学卒業後は日本以外の地域を対象とする米政府関連の仕事に携わりました」

ウォーカー理事長にとって大きな転換点となったのが、2011年の東日本大震災です。「私にとって日本は、1歳から過ごした身近な国、そこにあるのが当たり前の国でした。日本に住む両親の安否を心配したことは言うまでもありませんが、東北の人たちの苦しみを見て、自分は日本のために何も貢献できていないと思いました。そこから少しずつ、日本に気持ちが向かうようになっていきました。グローバルな問題を見る時でも、常に日本と関連させながら物事を考えるようになったのです。その後、このプログラムのことを友人から聞き、応募を決めました。私が最も関心を持ったのは、このプログラムが世界的な視野を持つ人材を求めているという点です。実際に参加してみると、とにかくアドバイザーの先生方が素晴らしかった。私の人生においてずっと大きな存在だったヴォーゲル先生にお会いできて、長い時間を共に

し、深い関係を結べたのは嬉しかったです」

ウォーカー理事長はこのプログラムを通じて、日米関係の重要性を痛感したと言います。「ヴォーゲル先生やファー先生といった上の世代を継ぐ存在がもっと出てくるべきだと思います。日本には“これから”をつなぐアメリカの友人が必要です。同期の参加者とは今も交流があり、みんな、自分たちの世代が仕事をする番だという使命感に燃えています」

今、世界は再び激動の時代を迎えています。ファー先生はこう語ります。「これほどまでに国際関係が変動している時代はありません。けれど、このような時代だからこそ、国と国との同盟関係は船の錨のような役割を果たすと思います。第二次世界大戦後、日米の交流はさまざまな要素によって、一つひとつレンガを積み重ねるように築かれてきました。その中でも、知的交流が核となり、両国は知的インフラを構築してきました。長い時間をかけて積み上げてきたこの基盤を保持していくことが、私たちが突入しつつある変革の時代を乗り切るために必ず役に立つと思います」

JFはこれからも、日米協力に基づく世界への貢献を目指し、日本とアメリカの明日をつなぐリーダーたちによる、地球規模の課題解決に向けた取り組みを支援していきます。



ジョシュア・ウォーカー (Joshua Walker) 博士は、ニューヨークの日米交流団体、ジャパン・ソサエティの理事長兼 CEO です。CSPC 上級フェロー、コロンビア大学国際公共政策大学院客員准教授、Presidential Leadership スカラー、三極委員会デイヴィッド・ロックフェラー・フェロー、ミュンヘン安全保障会議ヤングリーダーでもあります。第16回中曽根康弘賞受賞。



ウォーカー理事長も参加した第4期生(2016年～2018年)の訪日研修時の集合写真。「このプログラムは、質の高い勉強ができることに加えて、日本文化体験と合宿形式ならではの深い議論という、ここでしか得られないものが組みあわされているのです。アドバイザーや参加者との絆は、私にとって生涯の財産です」とウォーカー理事長は話します。

地域の伝統・文化を通じた「心の復興」： 震災を乗り越えて



「三陸国際芸術祭2019」で披露された国際共同制作芸能「シシの系譜／その先に」。「シシの面」という共通項をもつ日本とバリの郷土芸能が共演しました。撮影：井田裕基

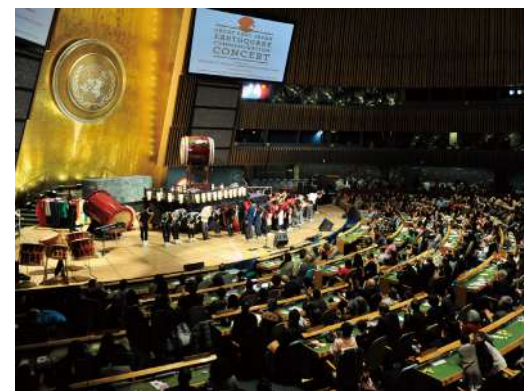
大規模自然災害からの復興の過程においては、被災者の復興へのあゆみを支えることや、コミュニティの再建といった観点も、重要な意味合いを持ちます。国際交流基金は、災害や紛争が起きた地域で、伝統・文化交流を通じた「心の復興」に向きあってきました。

2011年3月11日に発生し、東北地方に甚大な被害をもたらした東日本大震災。国際交流基金（JF）では、震災翌年から多岐にわたる復興支援事業を実施しました。ここでは、被災地の文化をよりどころとして、国際文化交流事業を通じて地元の人たちが立ち上がっていった過程で、JFがどのように関わってきたかをお伝えします。

震災の発生以降、地震や津波の被害の様子は、世界中に発信されました。本来、東北地方には豊かな自然や文化があるにもかかわらず、悲惨なイメージばかりが海外の人々の「東北」の記憶として定着するのはとても残念なことで

す。もっとポジティブな東北の魅力をアピールしていけたら——というのはJFだけでなく当時多くの日本人が抱いていた思いではないでしょうか。国際文化交流機関ならではの「文化」と「交流」という2つのキーワードをもとに何ができるか、JFでは議論を重ねていきました。

JFはまず2012年3月からの約1か月間、総合文化事業「震災を乗り越えて—日本から世界へ—」を企画し、東北や復興再生をテーマにした舞台公演や展覧会、講演会、映画・ドキュメンタリー上映会などのプログラムを、アメリカ、フランス、中国などで実施し、世界中から



2012年、国連総会議場でのコンサートでは、湧水神楽（わくみずかぐら）と鬼太鼓座（おんでこぎ）& Musiciansが力強い演奏を披露しました。広い会場は熱気に包まれ、終演後もスタンディングオベーションがやまず、大盛況となりました。撮影：Lee Wexler

被災地に寄せられた支援に対する感謝の気持ちを届けました。舞台公演では、東北に伝わる神楽に、和太鼓をはじめジャンルを超えたミュージシャンが加わって作り上げた「東北」を伝えるステ

ージを上演。開催地の1つとなったニューヨークの国連総会の会議場では、当時の潘基文事務総長もこの舞台を鑑賞し、国際社会が東北と共にあるという力強いメッセージを発信しました。

日本と海外、同じ被災経験を もつ青少年の交流事業

災害や紛争が起きた後、その地域の伝統や文化の復興に協力する活動は、以前からJFが取り組んできたことでした。

2005年8月に発生した大型ハリケーン・カトリーナの被害に遭ったアメリカ・ニューオリンズには、翌年に阪神・淡路大震災からの復興を担った専門家らを派遣。経験の共有と語り継ぎを行う対話事業を継続的に実施しました。こうした経験の積み重ねが、東日本大震災の復興支援事業において大いに役立ったのです。

2012年4月からの1年間は、「震災を乗り越えて—世界とつながる—」をテーマに、新たに10件の事業を実施。なかでも、同じ被災経験をもつ日本と海外の青少年の交流事業は、参加した若者たちの思いが見事に重なるものでした。

その1つが「宮城—ニューオリンズ青少年ジャズ交流」です。東日本大震災の1か月後、津波で楽器を流された宮城県泉仙沼市のジュニアジャズオーケストラ「スウィング・ドルフィンズ」に、米ニューオリンズから新しい楽器が贈られました。同地はジャズ発祥の地であり、上述の通り2005年にハリケーン

による被災経験もあります。そのつながりをもとに、2012年10月、ニューオリンズの高校生を中心とするジャズバンドが宮城の被災地3か所を訪れ、ジャズで人々を応援。地元のジュニア・ジャズバンドとも共演しました。さらに翌年、今度は「スウィング・ドルフィンズ」のメンバーがニューオリンズを訪問し、現地の仲間と再会して演奏を披露。互いを思う心がハーモニーを生み出しました。

また、「南三陸一チリ 青少年音楽・詩作交流」は、詩と物語がつながり交流でした。津波の被害に遭った宮城県南三陸町の高校生と、2010年2月に発生したチリ大地震の被災地であるチリ中部のコンスティトゥションの高校生が、両国でワークショップを行い、自分たちの被災経験から作った詩や物語を交換したのです。海を越えて、2つの地域の青少年が対話を重ねました。

東北・三陸地域とアジアを 芸能でつなぐプロジェクト

さらに、2014年に新設されたJFアジアセンターでは、東北・三陸地域とアジアの地域との継続的な文化交流が実施されました。2015年に始まった「Sanriku-Asian Network Project (サンプル)」もその1つ。東南アジアの芸能を三陸に招へいし、また三陸からも郷土芸能を東南アジアに派遣する交流事業でした。

南三陸町在住で、旧仙台藩領に伝わる「行山流水戸辺鹿子躍(ぎょうざんりゅうみとべししおどり)」の継承者であ

る小野寺翔さんは、サンプルの一環で、2018年にインドネシアのバリ島を訪問しました。

当時専門学校生だった小野寺さんはその時の思い出をこう語ります。「宮城県と岩手県の高校の芸能部に所属する高校生たちと一緒に、南三陸町に伝わる鹿踊を披露しました。私が鹿踊を始めたのは小学5年生の時ですが、30年以上前に発祥し、ずっと地元の中だけで続けられてきた踊りが、まさか国を出て異国の人たちの目に触れることがあるなんて、信じられない思いでした。バリの伝統的な踊りも見せていただき、踊り手さんと話すうちに、新たな気づきがありました。それは、私たちの鹿踊とバリの伝統舞踊は、使う楽器や踊りのテンポなどは違うけれど、土地に宿る悪いものを追い払い、人が幸せに暮らしていけるように祈りを込めて踊る、という目的は同じだということ。三陸とバリは遠く離れていて、文化圏も全く違うのに、地元の踊りに共通性がある不思議……それは、交流しなければ気づかなかったことでした」

交流事業を経験して、鹿踊に対する新たな思いが生まれたという小野寺さん。「震災にも負けず30年以上続いている鹿踊ですが、発祥などいくつかの点はいまだ謎のままです。それらの謎について、いろいろな地域と交流を続けながら、少しずつでも紐解いていきたい。そして、これから先も鹿踊が続いていくように、子どもたちに興味を持ってもらえるような発信をしていきたいと思っています」

震災を契機とする日本とアジアの交流が、日本の郷土芸能の新たな未来を描く一歩につながっていく——人と人とが思いあい、触れあうことで生まれた発見を、JFはこれからも多くの人と共有していきます。



バリ島訪問事業に参加した小野寺翔さん(右端)。現地ではバリ島の郷土芸能を教わる機会もありました。異なる芸能を体験することで、自らが担う鹿踊についての理解も深まったといいます。写真提供:小野寺翔

2018年、岩手県と宮城県の鹿踊団体から選ばれた7名の青少年が、インドネシアのバリ島を訪問。約1週間にわたり、バリ舞踊やガムランの団体と交流しました。写真提供:小野寺翔



特設サイトのご案内



50周年を記念した特設サイトを開設しました。
JFの50年がつまった豊富なコンテンツをご用意していますので、ぜひご覧ください。



JFをめぐる物語

- 日本の優れた舞台芸術を、オンラインで世界の隅々に配信
 - 日本語教育機関をネットワークでつなぎ、さくらの花を世界中に咲かせる
 - セーヌ河岸から日本文化を発信、パリ日本文化会館へようこそ
 - 地域づくりの担い手を応援する地球市民賞で、世界と地域とをつなぐ
- ……ほかサイトオリジナル記事を随時配信

50年を写真とともに振り返る年表や、数字で見る50年の足跡など、JFをさらに深く知っていただけるコンテンツもあります。



<https://jf50.jpf.go.jp>

JAPAN FOUNDATION
国際交流基金

50th
ANNIVERSARY

国際交流基金 設立50周年記念誌

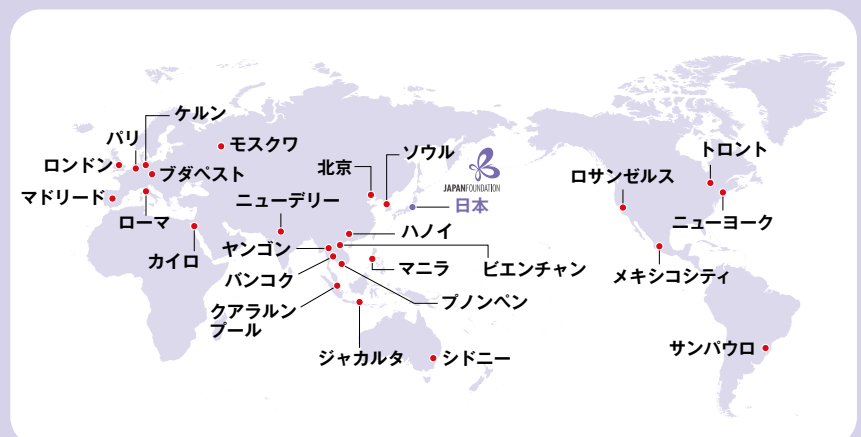
2022年11月発行 第2版

編著・発行／独立行政法人国際交流基金
〒160-0004 東京都新宿区四谷1-6-4

Copyright ©2022 The Japan Foundation,
All Rights Reserved.

JF世界の拠点

国際交流基金(JF)は24か国25都市に海外拠点を設け、グローバルな活動を展開しています。





國際交流基金設立50周年



JAPANFOUNDATION
國際交流基金